

告 報 動 活

国際シンポジウム・記念講演

「世界から見た日本文化——多文化共生社会の構築のために」報告

伊坂青司（人文学研究所所長）

「世界から見た日本文化——多文化共生社会の構築のために」というテーマを設定し、2005年11月11日・12日の両日、横浜キャンパス・セレストホールにおいて国際シンポジウム・記念講演を開催した。神奈川大学外国語学部設立40周年、および国際文化交流学科新設を記念する事業の一環として、外国語学部と人文学研究所を主催団体とし、人文学会の協賛を得て行われた。報告にあたって、まず開催趣旨とプログラムの一覧を示しておきたい。

神奈川大学外国語学部設立40周年・国際文化交流学科新設記念

国際シンポジウム・記念講演

「世界から見た日本文化——多文化共生社会の構築のために」

主催：神奈川大学外国語学部

神奈川大学人文学研究所

協賛：神奈川大学人文学会

【開催趣旨】

世界のグローバルゼーションが進行するなかで、諸民族固有の多様な文化が均質化されつつあります。そのような時代趨勢のなかで、風土と歴史に培われた伝統的な民族文化の固有性を見直そうという気運も生じています。欧米の文化を受容して現代に至っている日本でもまた、伝統的な文化の固有性が失われたわけではなく、むしろグローバルゼーションの進行のなかでその価値を改めて見直すことが求められています。

日本近代化の拠点となった横浜では今日、多様な異文化の交錯する都市として、日本文化と異文化の交流しあう共生社会の構築が焦眉の課題となっています。このような横浜に位置する神奈川大学において、世界から見た日本文化の特質と世界に向けた日本文化発信の可能性について、東アジアおよび欧米における第一級の日本研究者の視点から縦横に論じていただきます。積極的にご参加下さい。（入場無料、使用言語：日本語）

【プログラム】

第一部 国際シンポジウム

日 時：2005年11月11日（金）午前10時30分～午後5時30分
会 場：神奈川大学横浜キャンパス・16号館セレストホール

開会挨拶：神奈川大学外国語部部長 山口建治

総合同司会：神奈川大学人文学研究所所長 伊坂青司

午前の部 報告 (10時30分～12時)

メアリー・ナイトン (東京大学教養学部・比較文学比較文化助教授)

「戦後占領を脱する日本文学と文化——現在の観点からの読み直し」

午後の部 報告 (1時～4時30分)

王勇 (浙江工商大学・日本語文化学院院長)

「坐る仏と立つ神——日本文化への視座」

シュテファイ・リヒター (ライプツィヒ大学東アジア研究所長・日本学科主任教授)

「『実体』としての日本か『クール』な日本か——グローバル化時代における日本研究のチャンスとリスク」

シンポジウム全体討論 (4時30分～5時30分)

コメンテーター：鈴木彰 (神奈川大学外国語学部助教授)

第二部 記念講演

日時：2005年11月12日 (土) 午前10時30分～午後5時

会場：神奈川大学横浜キャンパス・16号館セレストホール

午前の部 (10時30分～12時)

川田順造 (神奈川大学大学院・歴史民俗資料科学研究科教授)

「世界のなかの日本文化を考える——その方法をめぐって」

司会：伊坂青司 (人文学研究所所長)

午後の部 (1時～2時45分)

ドミトリ・ラゴージン (ロシア科学アカデミー社会科学研究所主任調査官)

「現代ロシアにおける日本文学」

コメンテーター：中本信幸 (神奈川大学名誉教授)

山火正則学長挨拶

特別記念講演 (3時～4時30分)

ドナルド・キーン (アメリカ・コロンビア大学名誉教授)

「日本の秘められた文学」

司会：水野晴光 (人文学研究所「文化のかたち」研究会代表)

以上の開催趣旨とプログラムに従って行われた国際シンポジウムと記念講演の概要は、以下の通りである。

開会冒頭で山口建治外国語学部長は、今回の国際シンポジウムと記念講演が神奈川大学外国語学部設立40周年と国際文化交流学科新設を記念するものであり、とりわけ国際文化交流学科の新設が外国語学部の再出発となるであろう意義を強調した。

第一部として行われた「国際シンポジウム」の最初の報告は、メアリー・ナイトン女史による「戦後

占領を脱する日本文学と文化——現在の観点からの読み直し」であった。女史は、戦後日本の女流作家である倉橋由美子の作品『バルタイ』と『スミヤキストQの冒険』を採り上げ、1960年代の日本における「革命」精神に孕まれた複雑性を、それらの作品解釈によって浮き彫りにした。その解釈は、文学テキストのなかに止まるものではなくて、「革命」精神に見られる「有機的なもの」（「細胞」）という生命論的・生物学的概念を、現代建築運動の理論である「メタボリズム」（新陳代謝）と対比的に論じる、興味深い視点によって裏付けられたものであった。

午後の部では、王勇氏が「坐る仏と立つ神——日本文化への視座」と題して報告された。日本独特の茶室や日本庭園の枯山水、そして広隆寺の国宝「半伽思惟像」などを例にして、日本文化のなかにある「坐る」姿勢が西洋文化のなかにある「立つ」姿勢と対照的であることを指摘した。そしてこの東洋文化にも共通する「坐る」姿勢が、内面的な精神世界へと通じることの重要性を強調された。「坐る」文化が日本に限定されるものではなく、アジアの道のネットワークのなかで理解することができるという視点は、日本文化とアジアの文化交流にとって重要なものであると感じることができた。

続いて、シュテフイ・リヒター女史は「実体」としての日本か「クール」な日本か——グローバル化時代における日本研究のチャンスとリスク」と題して報告された。近代社会のなかでは日本学や日本研究はナショナリズムの枠内にあったが、1970年代以降、「方法的ナショナリズム」を克服しようという試みが出てきていることが指摘された。文化のアイデンティティを不断に分節化することによって、「日本」もまた「世界から見た日本」「日本とドイツ」「東アジアにおける日本」といったアイギュレーションによって分節化されるべきことが提示された。日本研究のリスクを、むしろこれらの日本学にとってのチャンスとして積極的に捉えるという視点が印象深かった。

シンポジウムの全体討論は、コーディネーターの鈴木彰氏の司会によって進められ、鈴木氏から提題者への質問と提題者相互のダイナミクスによって、基調講演の内容がより豊かで鮮明なものとなった。討論の多岐にわたる内容についてカバーすることはできないので、ポイントになる部分のみをピックアップするにとめておきたい。

メアリー・ナイトン女史は、倉橋由美子の作品に象徴される1960年代の日本の文化状況が現代日本にもつながっている側面のあることを指摘された。倉橋の文学や60年代の日本の状況が、はたしてアメリカにおいて理解できるかどうかという点については、アメリカの60年代の状況とは必ずしも共通するものではないとされた。むしろ現代の日本の学生は、60年安保闘争の学生運動のように活動することはないが、別の方法で運動の生じる可能性は否定できないとされた。また60年代の建築運動としてのメタボリズムは、同じような規模ではないにしても、黒川紀章に見られるように現代日本にもつながっていることが指摘された。そして生物学的な概念であるメタボリズムが、現代の生物学における遺伝子の構造にも通じるという指摘は、興味深い問題につながるものと思われた。

王勇氏は日本の文化をアジアの文化交流史という文脈のなかで理解する視点から、シルクロードならぬブツクロードについて解説された。日本から派遣された遣唐使は20年に1回と多くはないが、中国と日本の文化的共通性を感じさせるのは書籍の伝播によるという。正倉院に遺された書籍のように、日本人も中国人と同じ書籍を読んだゆえに、共通した精神風景が形成されてきたとされた。また、西洋と東洋を対比するステリオ・タイプの議論に対しては、「坐る」文化のように風土のなかで形成されてきた生活様式の共通性を指摘された。さらに西洋と東洋という対置ではナショナル・アイデンティティを脱構築するのではなくて再構築することにならないかという質問に対しては、アジアの文化のなかの多様性の側面を浮き彫りにするためにも、西洋と東洋との対比が有効であるとされた。

シュテフイ・リヒター女史は、文化的多様性という観点から、また異なったパースペクティヴから、エリア・スタディーズを研究対象にする必要性を改めて強調した。また日本のポツポツカルチャーが外国

に与える影響力が一般には評価され、また漫画やアニメが研究対象として認められるようになってはきたが、それらがどうして日本だけではなく欧米やアジアに広がっているのかを理解するには、現代の生活様式や社会の機能のあり方を全体として見ることが重要であるとされた。さらには、ドイツにおいて日本学が置かれている状況のリスクを、むしろ日本学と中国学を東アジア学として統合するなど、国際的な連携による日本研究という方向性へのチャンスとして捉えることが改めて提示された。

*

二日目の第二部は、3名の先生方に記念講演をしていただいた。

午前の部では、川田順造氏に「世界のなかの日本文化を考えるーその方法をめぐって」と題して講演いただいた。グローバル化のなかで多文化の共生はどのようにして可能か、日本文化は世界のなかでどのような位置を占めるかという二つの問いに答えることを課題として、グローバル（地球規模）をユニヴァーサル（普遍的）と混同することなく、ローカル（地方的）な文化の価値に視点を置くことがまず提示された。幕末から明治期の日本文化がヨーロッパでどのように理解されていたのか、文化の遠近法という手法と画像を用いながら検証された。具体的な例として、日露戦争前後の時代にブッチーニのオペラ『マダム・バタフライ』に映し出された「日本」は、当時のヨーロッパと日本との特殊な関係のなかで作られたもので、けっして普遍的なものではないとされた。ヨーロッパの日本理解は固定的に捉えられるべきではなく、変動する歴史的条件のなかで変化するものであると同時に、日本人にとつての「世界」もまた歴史的状況によって異なるということが強調された。「日本」と「世界」との関わりが歴史的状況のなかで変化するという視点は、画像を資料にしながら具体的に説得的であり、講演の後の会場との質疑応答もまた活発に行われた。

午後の部では、当初記念講演を予定していたザチャエスラフ・V・イワノフ氏（ロシア・世界文化研究所所長）の来日が困難になり、事前に送っていただいたロシア語原稿の日本語訳「ロシア学者から見た日本仏教」を会場で代読することとした。ロシア語からの翻訳と代読については、本学のロシア語担当で人文学研究所の常任委員でもある堤正典氏が担当した。

それに引き続いてドミトリ・ラザーゼン氏に「現代ロシアにおける日本文学」と題して講演をしていただいた。これまでのロシアでは、日本研究者や翻訳者によって日本の古典文学と日本文学の紹介が行われ、世界文学の一部として広く認められるようになっていく現状が報告された。特に90年代の改革の結果、「自由空間」となったロシア社会のなかで、読者の関心が現代日本文学にシフトし、いわゆる「村上春樹ブーム」が生じるなどの現象が生じているという。そのような現代文学への関心の高まりの背景に、「ハイテク」風景と神話的意識の結びつき、現代文明のなかの「怪しい」感覚、日常生活に満ちる神秘主義、自然への「親しい」態度などが指摘された。また近年のロシアにおける俳句コンクールや連歌のインターネット・サイトなども紹介され、ロシア社会における日本文学への関心の現状を知ることができた。

講演の後、コメンテーターの中本信幸氏からコメントがあり、それを踏まえて会場との質疑応答が活発にかわされた。

特別記念講演に先立って、山火正則学長から挨拶があった。神奈川大学のこれまでの歩みと全国の大卒における神奈川大学の位置づけを概観しつつ、今回の国際シンポジウムが外国語学部設立40周年および国際文化交流学科新設を記念して行われることから、特に国際文化交流学科の担うべき課題と国際交流に果たすべき役割について述べられた。またシンポジウムの報告者、記念講演の講演者、とりわけ

特別記念講演を引き受けていただいたドナルド・キーン氏への謝辞が述べられた。

ドナルド・キーン氏の経歴と著作が司会の水野晴光氏によって紹介された後、氏は「日本の秘められた文学」と題して特別記念講演をされた。日本の日記文学をテーマにして、平安朝から現在に至る日記の伝統が、日本にしかない文学のジャンルとして性格づけられた。日記は平安朝の公家では、長男が誤りなく先例に従って行動するように書かれた〈公〉の日記であったが、同じ時代の女性には自分の悩みを日記の中で語り、この〈私〉の日記が文学として読まれるようになったという。また鎌倉時代から旅日記が多く書かれ、京都から鎌倉へ旅行する途中で見たものが日記に描写されたりしたが、徳川時代の旅日記の最高のものである芭蕉の紀行文には、過去の歌に詠まれた「歌枕」からインスピレーションを受けるといふ文学的な目的があったという。文学としての価値がないように見える日記でも、本人にとつて大事であるだけではなく、時代の世相を伝えるものとして価値があるのであり、ごみと一緒に捨てられている日記は「秘められた文学」であるとされた。氏の講演と会場との質疑応答により、日本における日記文学の伝統と日記の持つ意味を改めて見直すきっかけになったと思われる。

＊

二日間に渡って行われた国際シンポジウム・記念講演の参加人数は、第一日目の国際シンポジウムが延べ約800名、第二日目の記念講演が延べ約350名で、二日間を通してみると延べ約1150名という盛況であった。また記念講演の後に開催されたシセプションには約60名の方々に参加していただき、盛況のうちに全日程を終えることができた。

私たちの企画に賛同して、アメリカ・ドイツ・ロシア・中国から遠路はるばる来日していただき、また国内からお忙しいなか報告と討論、そして講演をいただいた方々に、厚く御礼を申し上げます。今回の国際シンポジウム・記念講演の成果については、2006年度に『人文学研究叢書23』として刊行を予定している。

また今回の企画は、神奈川大学学術交流事業予算によって実現した。学長を始めとする教学執行部、また学長室のご支援に御礼を申し上げます。さらに、今回の企画を外国語学部設立40周年記念事業として位置づけていただいた山口建治外国語学部長、ならびに実際の運営に携わっていただいた実行委員のメンバー、人文学研究所の運営委員のメンバー、そして同研究所の事務の方々、アルバイトの学生諸君に感謝したい。

「ドン・キホーテ・ウイーク・イン・神奈川大学」について

～資料 ハビエル・サン・ホセ・レウ教授（サラマンカ大学）による
記念講演「21世紀に生きるドン・キホーテ―歴史と現代」～

2005年は神奈川大学外国語学部設立40周年の年であるとともに、スペインが世界に誇る小説（セルバンテス著『才知あふるる郷士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャEl Ingenioso Hidalgo Don Quijote de la Mancha』の出版400周年の年でもある。この2つの出来事を記念するため、スペイン語学科・〈ドン・キホーテ・プロジェクト〉は、下記のプログラムによる「ドン・キホーテ・ウイーク・イン・神奈川大学（スペイン語ではSemana Cervantina en la Universidad de Kanagawa）を企画し実行した。以下、同プログラムの概要を記すとともに、資料として、この催しのため本学の国際学術交流提携校であるスペイン・サラマンカ大学から招聘したハビエル・サン・ホセ・レウ（Dr. Javier San José Lera）教授による記念講演（全文）を掲載する。

青木 康 征

ドン・キホーテ・ウイーク・イン・神奈川大学
期 間：2005年11月25日～12月2日
場 所：神奈川大学横浜（六角橋）キャンパス
催 事：Ⅰ）講演会

2005年11月25日（金） 10：30～12：00 20-310講堂

「ドン・キホーテの魅力」 岩根 固和（スペイン語学科教授）

2005年11月25日（金） 14：40～16：10 23-203講堂

「セルバンテスとインディゴ」 青木 康征（スペイン語学科教授）

2005年12月1日（木） 10：45～12：00 7-34講堂

“Vitalidad del Quijote en el siglo XXI—Historia y Modernidad”

（邦題「21世紀に生きるドン・キホーテ―歴史と現代」）

ハビエル・サン・ホセ・レウ（サラマンカ大学スペイン語学科教授）

Ⅱ）スペイン語学科生による語劇

2005年12月2日（金） 13：40～15：00 16号館セレストホール

“Don Quijote”（R. アスコナ／M. スカパーロ 翻案／V. カルデロン・デ・ラ・バルカ 脚色）

加えて、学科教員はそれぞれ普段の授業のなかでドン・キホーテについての認識や知識を啓発し涵養する場を設けたほか、学科関連ゼミナール生をはじめとする多くの学科生の協力を得て、つぎの諸作業にも取り組んだ。1）2005年12月2日に上演した語劇「ドン・キホーテ」のDVD版製作、2）同語劇「ドン・キホーテ」の上演にいたるまでの舞台裏（検討会、稽古場面、裏方作業など）を映像化したDVDの製作 3）既存のスペイン語劇場用映画「ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ」の日本語字幕付きDVDの製作、など。

さらにまた、これらのアクティビティと並行して、神奈川大学図書館の企画による＜外国語学部設立40周年記念 ドン・キホーテ（前篇）出版400周年展＞が、2005年11月中旬から2006年3月末日まで、同館展示コーナーにおいて開催された。

（あおき・やすゆき プロジェクト・コーディネータ）

【資料】

Vitalidad del *Quijote* en el siglo XXI. Historia y Modernidad

Javier San José Lera
Universidad de Salamanca (España)

Dos conmemoraciones importantes han permitido esta reunión: los 40 años del establecimiento de la Facultad de Lenguas Extranjeras y los 400 años de la publicación de la Primera Parte del *Quijote*. Las dos son fechas dignas de celebración, y las dos señalan el camino de apertura al mundo: si Don Quijote sale al mundo y crece en confrontación con los otros, una Facultad de Lenguas Extranjeras permite el conocimiento mutuo y enriquecedor de los otros, por su lengua y su cultura. Por eso me parece de justicia el reconocimiento de quienes hacen posible que los espacios que nos separan se acorten y que las fronteras se reduzcan a través de la cultura. Y quiero agradecer a quienes han depositado en mí la responsabilidad de colaborar en esta celebración y me han concedido el honor de participar en ella: el Departamento de Español de la Universidad de Kanagawa y en especial al prof. Yasuyuki Aoki, excelente organizador y anfitrión.

En la celebración de los 40 años de esta Facultad de Lenguas Extranjeras, quiero comenzar recordando a uno de los pioneros en este intercambio cultural, el poeta y dramaturgo granadino Miguel Pizarro (amigo de García Lorca), que fue el fundador de la primera escuela de español en Japón, la de Osaka. Su viaje a Japón en 1921 resultó un prodigio de fértil intercambio: le puso en contacto con una literatura que le fascinó, el teatro *Noh*, y la poesía que encerraban el alma de este país, y que se fundieron con su alma propia andaluza; en su obra se fraguó la esencia del *haiku* que insufló a la poesía de Lorca y de la vanguardia española un acendrado lirismo.

Años después de su experiencia japonesa, Miguel Pizarro, en el exilio americano, llevaba consigo siempre un *Quijote* que guardaba en el bolsillo, y que leía como el texto que le mantenía conectado con su lengua y su cultura de origen.¹

Muchos años antes, en 1549 (Cervantes tenía entonces sólo dos años) san Francisco Javier llegó a Japón trayendo consigo su religión y su lengua. ¿Cabría pensar que el evangelizador o sus acompañantes portarían consigo libros de literatura para su entretenimiento y para la enseñanza de la lengua española? Es verosímil. ¿Habrían sido esos libros, libros de caballerías? Tampoco es rechazable: el espíritu guerrero y aventurero alienta la milicia cristiana, tal y como la entendía el fundador de los jesuitas: los evangelizadores, como los conquistadores de América, plantean sus hazañas en lejanas tierras con el recuerdo de las hazañas caballerescas; la lectura de estas ficciones había sido muy del gusto de Santa Teresa, y del fundador de los jesuitas y compañero de Francisco Javier, san Ignacio de Loyola.² ¿Llegaron al Japón del siglo XVI algunos ejemplares de estos libros que alimentarían la locura de Don Quijote? Podemos jugar a imaginarlo, aunque los datos nos indiquen que lo que interesa difundir entonces es la literatura espiritual de un fray Luis de Granada.

Hoy me cabe a mí la enorme responsabilidad de transmitirles una lectura de este texto que ha movilizándolo en este año 2005 a tantos cervantistas por el mundo.³ Y yo me confieso, más que un cervantista al uso, un quijotista, seducido y perplejo por la inabarcable grandeza, por la sugerente inmensidad de posibili-

dades que se abren bajo los pies del lector, tras la lectura de cualquier página, de cualquier pasaje del *Quijote*. Y como tal, me conformaría con ofrecer aquí aunque sólo fuera un poco de la pasión que siento por esta obra, junto con la inmensa perplejidad que me producen sus logros. Desearía provocar lo que contaba hace apenas un mes en Madrid Katsuyuki Ogiuchi, el más reciente traductor del *Quijote* al japonés, que resultó tan emocionado de una conferencia de Martín de Riquer en Barcelona en 1966 que salió a comprar el libro, iniciando así una apasionada relación con el texto y la cultura española.⁴ Yo me conformo con que alguno de ustedes, que no haya leído aún el texto, tenga al salir de aquí la gana de leerlo o volverlo a leer con más información. Y, siendo un poco más ambicioso, me gustaría contribuir a derribar la idea de que los clásicos están lejos de los jóvenes, en España y en Japón.

Al comprobar que es una obra que sigue gustando leer, que admira y se actualiza en cada lectura, nuestra tarea ante los jóvenes estudiantes debe ser la de buscar claves que expliquen, pero no impidan el disfrute (huir del peso de la erudición, casi infinita sobre *El Quijote*, huir del síndrome de Stendhal ante la belleza de Florencia y sentir la abrumadora carga de necesitar saberlo todo, visitarlo todo); y claves que, al mismo tiempo, formen la competencia lectora y permitan profundizar en el misterio de la seducción de esta obra e inviten a seguir leyéndola. Por eso huir de las explicaciones excesivamente filológicas y proponer un acercamiento construido sobre la experiencia lectora del texto -tal y como me propuso el prof. Yasuyuki Aoki- puede contribuir a que el lector joven sintonice con la obra.⁵

Esa búsqueda de claves es el sentido de los dos vectores que adopto como caminos para considerar la vitalidad del *Quijote* en el siglo XXI. Mi conferencia de hoy quiere presentar, por un lado, algunos aspectos de la historicidad de la obra, compleja y no exenta de misterios: siendo Cervantes casi un “don nadie” en el panorama de las letras, casi un anciano que publica esta obra cuando ya tiene 58 años y ha perdido casi todos los trenes de la literatura (el de la poesía en manos de Góngora o del más joven Quevedo; el del teatro con el cetro indiscutible de Lope de Vega; el de la narración con un *Guzmán de Alfarache* que se vende muy bien, y del que se promete en breve segunda parte); en estas condiciones hace en su narración cosas que nadie antes ha conseguido hacer, y contra viento y marea, sin pertenecer a círculos de influencia social ni literaria, con prisas y mal editado, sin alcanzar un éxito que pudiéramos llamar clamoroso, hace removerse los cimientos de la poética clásica y del mundillo literario de su tiempo, provocando la reacción de quienes se sienten “amenazados” en su situación de privilegio por la invención de Cervantes, y contestan con una obra que quiere ridiculizar al *Quijote* de 1605 y muy al contrario, provoca el nuevo fruto genial del *Quijote* de 1615.

Compleja y misteriosa historicidad, por un lado. Pero por otro lado, una modernidad descolante que justifica y sigue alimentado la vitalidad de la obra y que deben justificar ante nosotros, lectores del siglo XXI la necesidad de seguir leyendo o de empezar a leer quienes aún no lo hayan hecho, a un clásico. Y es un clásico, porque a su dimensión histórica une una proyección en el tiempo que asegura su lectura perdurable y enriquecedora: la construcción de mundos personales que proyecta la obra como novela moderna y como portadora de valores. Así pues, propongo aquí un esbozo de lectura del *Quijote* en el tiempo (histórico) y para el tiempo (moderno).

Vayamos por partes:

Dos afirmaciones del prólogo nos pueden servir de cimiento para la construcción de la historicidad compleja del *Quijote*:

1.- El *Quijote* es una parodia contra los libros de caballerías: “porque todo él es una invectiva contra los libros de caballerías” y “esta escritura no mira más que a deshacer la autoridad y cabida que en el mundo y en el vulgo tienen los libros de caballerías”. Un propósito humilde (¿un tópico de humildad?), dado que a las alturas en que sale a la luz el libro de Cervantes, los libros de caballerías están ya en desuso; pero lo cierto es que la inversión degradatoria que es la parodia recorre todo el libro, desde la portada en que se anuncia el título, con el nombre burlesco del personaje y su tierra natal, no Gaula o Grecia o Hircania, sino la cercana y conocida por todos llanura de La Mancha, hasta los orígenes, las armas (desde la lanza antigua y el rocín flaco hasta el yelmo/bacía de Mambriño), los ritos (nombrado caballero en una venta, por el ventero y dos prostitutas), las aventuras, el escudero o el lenguaje desfasado y viejo.

2.- El *Quijote* es libro para todos, cuyo objetivo primero es provocar la risa: “Procurar que el melancólico se mueva a risa, el risueño la acreciente, el simple no se enfade, el discreto se admire de la invención, el grave no la desprecie, ni el prudente deje de alabarla”. También esta perspectiva es consecuencia de la voluntad de parodia, que adopta una modalidad burlesca que mueve a la risa.

Es cierto que pretender que el *Quijote* es sólo una obra de risa, es reducir mucho la capacidad de sentido de la obra: aunque una lectura humorística, lúdica no es necesariamente una lectura superficial, pues el humor es una herramienta de disolución del mundo, como recuerda Aristóteles (Retórica, III 1419b): “echar a perder la seriedad de los adversarios por medio de la risa”. Y no es menos cierto que esa fue la lectura que buscó Cervantes, y la lectura que se difundió entre los primeros lectores. Baste recordar la anécdota que transmite Gregorio Mayans cuando escribe su *Vida de Cervantes*

«Estaba el rey don Felipe, tercero de este nombre, en un balcón de su palacio de Madrid y, espaciando la vista, observó que un estudiante junto al río Manzanares, leía un libro y de cuando en cuando interrumpía la lección y se daba en la frente grandes palmadas, acompañadas de extraordinarios movimientos de placer y alegría. Y dijo el rey: “Aquél estudiante o está fuera de sí o lee la Historia de Don Quijote»

La risa procede, en primer lugar, de la locura del personaje. Una locura que no es episódica, sino funcional. Cervantes da con la solución “mágica” de su escritura al presentar a un personaje “ingenioso”, es decir, en el que predomina el ingenio o la imaginación (potencia intelectual distinta del entendimiento en las teorías de la época), y que se desborda hasta la locura. La locura de Don Quijote es el pasaporte de verosimilitud que obtiene la narración para autorizar su paso por la fantasía desbordada; y la guía del lector en el viaje por los mundos de la imaginación. El mismo Cervantes se lo hace conocer unos años después al lector de *El viaje del Parnaso*: “Yo he abierto en mis novelas un camino / por do la lengua castellana puede/ mostrar con propiedad un desatino”. (IV, 25-27).

La presencia de un personaje loco no es novedad en ese tiempo; desde la ficción, el modelo de Ariosto y su *Orlando furioso* se ha señalado como referencia de Cervantes; desde la invectiva paródica, el *Elogio de la locura* de Erasmo. Muy cerca de Cervantes, Lope de Vega había compuesto sobre la figura cómica del loco sus comedias *Los locos de Valencia* y *El bobo del colegio*; Cervantes vuelve a experimentar con la locura en *El licenciado vidriera*. Pero estos son locos enamorados, “locos cuerdos” que se fingen locos para poder obtener sus propósitos, o personajes a los que se hace enloquecer para poder decir bajo su condición verdades que la cortesía social no toleraba oír en boca de personajes sanos. Pero en *El Quijote* la dimensión es otra, porque aquí cumple la locura una función estructural y de ella se obtiene la mayor

rentabilidad narrativa: la locura le permite al narrador inventar todo un juego de perspectivas y un mundo transformado.⁶ Don Quijote es también un loco que tira a cuerdo, según le define el Caballero del Verde Gabán, con momentos de gran lucidez y preclaro entendimiento junto con los arrebatos del ingenio. Pero su dimensión psicológica interesa menos que el hecho funcional, por el cual la locura abre la narración y da paso a una transformación de la realidad, por la que las cosas nunca son lo que parecen: los molinos gigantes, las ventas castillos y las mesoneras princesas. Don Quijote actúa como un auténtico inventor de mundos; la realidad resulta transformada por su imaginación y la locura justifica -de cara al principio aristotélico de la verosimilitud- la alteración mágica del estado real de las cosas.

Además, a la locura de Don Quijote se llega a través de la lectura, por más que se quiera ver en su comportamiento una “melancolía adusta” que resulta de su edad, de su alimentación, o de su escaso trato con mujeres, de su abstinencia sexual y su desmesurada actividad intelectual.⁷ El primer narrador lo explica sin dudar y lo subraya hasta tres veces:

“Se enfascaba tanto en su *lectura* que se le pasaban las noches *leyendo* de claro en claro y los días de turbio en turbio; y así, del poco dormir y del *mucho leer*, se le secó el cerebro, de manera que vino a perder el juicio” (I, 1)

La locura de Don Quijote tiene un origen intelectual y literario, que seguramente Cervantes conoció en el anónimo *Entremés de los romances*, donde el personaje Bartolo enloquece de leer romances y se cree un personaje del Romancero; allí, según parece, intervino también un modelo de parodia contra Lope de Vega, en el contexto de las guerras literarias de comienzos del siglo XVII.⁸ Pero Cervantes va mucho más allá que su modelo; y lo hace de la mano de otra obra a la que admira y de la que aprende que los códigos literarios idealizados se desmoronan al ser confrontados con la cruda realidad. Me refiero a *La Celestina*, “libro en mi opinión divino / si encubriera más lo humano” dicen los versos de cabo roto del comienzo del *Quijote*. En *La Celestina* Calisto, el joven enamorado, comienza actuando según las normas del amor cortés, codificadas en la ficción sentimental de finales del siglo XV; pero ese código literario muestra su ineffectia al ser planteado sin tapujos en un ambiente de crudeza humana inusual (por eso a Cervantes le parece la obra “demasiado humana”) y enfrentar el amor literario al amor real, físico, carnal, y los ideales de belleza literaria al poder del dinero. El mundo de las ficciones caballerescas también se disuelve al confrontarse con una realidad en la que la guerra ya no se hace a espada, sino a cañonazos (recuérdese el discurso de las Armas y las Letras, de I, 38), los códigos del honor y del servicio son cosa de teatro, y las inversiones las hace un ventero, los castillos son ventas, los ejércitos, rebaños y los gigantes molinos de viento.

La lección distinta de Cervantes consiste en haber hecho esa confrontación desde el humor, desde una mirada amablemente humana, desde la que es la ironía y no el sarcasmo, el elemento disolvente, y la risa un objetivo de crítica amable. La lección bienhumorada de Cervantes, compartida a veces por Góngora (en los romances paródicos, por ejemplo, en algunas letrillas, o en el escondido humor de las *Soledades*), la aprendió también Lope de Vega, al final de su vida, al dar a la estampa, de la mano de su heterónimo burión, Tomé de Burguillos, sus *Rimas humanas y divinas*, donde se deshacen desde la risa los tópicos del petrarquismo poético. En todos los casos el humorismo, a través de la ruptura y de la parodia, es el disolvente: sarcástico y feroz en Rojas, malintencionado y guasón en Góngora, burión y desengañado en Lope, humano y amable en Cervantes; lúcido en los cuatro. Por esas rupturas también *La Celestina*, las *Soledades*, las *Rimas humanas y divinas del licenciado Tomé de Burguillos* y el *Quijote* son hitos de la creación más novedosa del teatro, la poesía y la novela del Siglo de Oro.

He hablado de novedad y este es un principio estético que hay también que contemplar en su contexto histórico, como elemento que vertebraba buena parte de la creación del siglo XVII, de Góngora a Gracián, de Cervantes a Lope de Vega. En una España en la que la novedad ideológica no es camino fácil y dinámica las posibilidades de avance del pensamiento y de la ciencia (recuérdese, por ejemplo, la paronomasia entre “novedades y no verdades” con que juega Quevedo), la novedad estética se valora de manera extraordinaria, como compañera del gusto (“porque el gusto puede mudar los preceptos”, escribe Lope en *El castigo sin venganza*). Por eso Lope escribe un *Arte nuevo* de hacer comedias; por eso Góngora trastorna con sus novedades expresivas el clasicismo poético. Y por eso Cervantes juega a innovar en un territorio que hasta entonces era casi inexplorado, el de la narración extensa en prosa, componiendo un *nuevo arte de hacer novelas* que se va haciendo al novelar.

Innovar no supone echar por tierra revolucionariamente la tradición poética aristotélica; esta teoría poética establecía como norma de la fábula la verosimilitud, que era el correlato poético de lo verdadero. Cervantes es, inicialmente, un clasicista, se ha formado en las preceptivas y siente el peso de la tradición retórica y poética, como se comprueba en sus polémicas teatrales con Lope. Pero siente también la necesidad de responder a las nuevas condiciones del mercado, a las que debe ajustarse si quiere vivir de su trabajo como escritor. De la misma manera que Lope y los dramaturgos se encargan de echar por tierra las unidades de tiempo y espacio que la poética aristotélica establecía para el drama, acuciados por la necesidad de atender a un género literario que cada vez es más espectáculo de mercado y menos literatura, Cervantes se las ingenia para mantenerse en los límites de la preceptiva y dar gusto a un público lector que ha comenzado a recibir con agrado las novedades de la narración extensa, como se comprueba con el extraordinario éxito del pícaro de Mateo Alemán, *Guzmán de Alfarache*. Ya he señalado cómo Cervantes consigue saltar las barreras de la verosimilitud sin atentar contra el precepto mediante la estrategia de la locura. Novedad y mercado editorial intervienen también en la composición material del *Quijote*, presionando a los impresores para poder sacar a luz el libro antes de que salga la segunda parte del *pícaro Guzmán de Alfarache* o de la pícara *Justina*. Y el deseo de hacerse con un mercado lector tuvo seguramente también algo que ver en la respuesta que el apócrifo Avellaneda (instigado, parece claro, por Lope de Vega) quiere dar a Cervantes. Y al mercado mira también Cervantes cuando anuncia desde las ediciones de sus *Ocho comedias* y de las *Novelas ejemplares* la segunda parte del *Quijote* o cita entre las obras de la biblioteca de don Quijote sus propias obras; la estrategia de autopromoción denuncia la existencia de un mercado lector al que se quiere mantener informado de la producción propia y atento a las novedades editoriales.

El gusto del público, convertido en ley estética para el teatro (“como las paga el vulgo es justo / hablarle en necio para darle gusto”) inspira también la variedad como principio creativo. Variedad que en *El Quijote* es uno de los elementos de composición más evidentes: variedad por la incorporación a la parodia del universo literario del Siglo de Oro, porque el *Quijote* es un libro de libros, desde la literatura de erudición filológica a la novela pastoril, desde el romancero hasta el teatro; variedad por la interacción de mundos que la locura de Don Quijote hace posible; variedad por las historias intercaladas; variedad por el diálogo polifónico, por la teatralización (algunos episodios son verdaderos entremeses, por ejemplo la visita nocturna de Matíornes, o el juego de burlas en casa de los Duques), por los elementos folclóricos y la tradición culta, por la reflexión metalingüística, por la diversidad de estilos lingüísticos... *Per troppo variar natura é bella*. La naturaleza es hermosa en su variedad y el arte imita a la naturaleza en eso: “Buen ejemplo nos da naturaleza/ que por tal variedad tiene belleza”, como también recordaba Lope de Vega en su

Arte nuevo, para subrayar

“que aquesta variedad deleita mucho”.

Hasta aquí un esbozo de algunos aspectos de la lectura histórica del clásico en la que podríamos haber-nos extendido durante horas, porque el *Quijote* es una obra sin fondo. Conocer este contexto ayuda a valo-rar la obra como pieza histórica de extraordinario interés y a formar la competencia lectora de la misma. Pero la pregunta que nos asalta a continuación es más difícil de responder ¿justifica esta historicidad una lectura actual? ¿Se puede leer la obra al margen de estas consideraciones históricas? ¿Por qué leer el Quijote aquí y ahora?

La vitalidad de Shakespeare, por ejemplo, es palpable; se ve en las carteleras teatrales de todo el mundo o en las numerosas adaptaciones al cine, de Orson Welles a Akira Kurosawa. *Ricardo III* por ejemplo, fun-ciona igual de bien en un montaje con estética de *pulp fiction* a lo Quentin Tarantino, que trasladado a una ambientación de la Alemania entreguerras;⁹ da igual la superficie, al fondo se percibe siempre el men-saje central de la obra, la violencia que generan las ansias ilimitadas de poder. ¿Y la vitalidad del *Quijote*? Parece imposible sacar al ingenioso hidalgo y a su escudero de su contexto histórico y que funcionen su literalidad y sus sentidos, quizá porque el teatro permite libertades que la novela no tolera. Pienso por ejemplo en las versiones cinematográficas de la obra: de Georg Pabst (1933) a Gutiérrez Aragón (2002) hay una imagen y un contexto de los personajes de los que resulta casi imposible prescindir, de forma que las versiones del Quijote resultan pálidas lecturas del original, o fallidas, cuando se descontextualiza como pretendía hacer Orson Welles¹⁰. Incluso en el último intento de descontextualización, que se acaba de estrenar hace escasos quince días (la versión teatral titulada *En un lugar de Manhattan* por Albert Boadella y *Els Joglars*), no puede prescindirse de la imagen clásica de los personajes: desde el cartel anunciador un Mickie Mouse con gafas de sol y letras de colores al estilo Broadway es arremetido por un Don Quijote al uso, montado en Rocinante, mientras Sancho, asustado se lleva las manos a la cabeza junto al rucio. Sólo las adaptaciones al mundo japonés del samurai, rompen la estética preestablecida (pero son, claro, exóticas excepciones).

Y sin embargo, la atracción que ejerce la obra ha hecho que las relecturas, reinventiones y representa-ciones del *Quijote* se extiendan a todo el universo literario posterior y a toda la creación artística, de la música a la pintura, de la ópera al musical. Parece como si el texto de Cervantes llevara la semilla para toda la creación posterior, con infinitas posibilidades de lectura creativa. Por eso también, el *Quijote* es un texto mítico, fundacional, en el que vemos por primera vez representada la naturaleza proteica y ambigua de la realidad en un territorio inexplorado: el de la novela.

¿Sobre qué se sostiene su vitalidad? En *El Quijote* se implica a todo el mundo, lo que se constata en el peso que cobra la presencia de las tres personas gramaticales: *yo, tú y él*. Es lo que he llamado la con-strucción de los mundos personales.

1. El mundo del “yo”

Es un mundo construido desde la locura, que magnifica el yo, individual e intransferible, que se impone a todo: “Yo sé quién soy, y sé que puedo ser no sólo los que he dicho, sino los Doce Pares de Francia” (I, 5); ese “yo” impone su mirada nueva, de iluminado, su mirada iluminadora y subjetiva sobre el mundo. La locura transformadora acerca al yo a la categoría de un dios y le da fuerza misteriosa a su ideal caballeresco. Don Quijote, poeta, profeta, demiurgo, capaz de transformar la realidad con sólo nombrarla

con sus palabras, encarna el ideal romántico de todo creador. Da igual quién o qué sea Dulcinea, campesina o dama, porque es la fuerza de la palabra la que la imagina y la crea, y no existe al margen de ese territorio, que cobra así la dimensión de un universo propio y definitivamente humano.

El yo impone su tiempo vital y su tiempo subjetivo, como en el episodio de la Cueva de Montesinos, donde el narrador anticipa el sentido del tiempo interior frente al tiempo real: poco más de una hora está Don Quijote en la cueva, según le dice Sancho y él responde

“Eso no puede ser -replica” Don Quijote- porque allá *me* anochece y amaneció y tornó a anocheecer y amanecer tres veces, de modo que *a mi cuenta* tres días he estado en aquellas partes remotas”. (II, 23)

También en el episodio de la Cueva de Montesinos, el “yo” de Don Quijote se expresa en una pesadilla, en escena que hubiera hecho las delicias psicoanalíticas de Sigmund Freud. Ese “yo” moderno incorpora lo vivido y lo deseado al sueño, en mezcla extraña; y vemos los demonios de un mundo interior, habitado por espantajos como Montesinos (capa morada, beca colegial verde, gorro negro, barba canísima y un rosario en la mano), doncellas vestidas de luto, una señora bastante fea (pálida y ojerosa) con un corazón humano en la mano, suspiros de un muerto que se queja con grave voz, grandes alaridos y llantos, acompañados de gemidos y angustiados sollozos... ¡Qué miedo! El mejor terror del cine japonés palidece ante las descripciones inventadas por el todopoderoso “yo” enloquecido del personaje cuando duerme.

Como todopoderoso quiere ser también el “yo” del que cuenta. A la afirmación del “yo” del personaje le corresponde la del “yo” del narrador, que se impone también desde el principio: “En un lugar de la Mancha de cuyo nombre *no quiero* acordarme”. Esa primera persona, el *no quiero* cervantino es un primer alda-bonazo de voluntad firme y de rotundidad casi infantil y genial, como una primera autoafirmación del narrador que impone, a la española, su real gana y que se quiere hacer desde el principio con el control de lo que cuenta y con la confianza del lector en su carácter omisciente.

Claro que ese control es pura apariencia, como enseguida comprobamos y esa confianza se ve pronto defraudada. De esa ruptura surge también la novela moderna.

2.- El mundo del tú: La invención del lector

Visto en el juego de espejos que es la narración, el *no quiero* es una trampa, una muestra inicial de la capacidad del autor para reírse de sí mismo como narrador y cuestionar los límites de la ficción; porque esa afirmación de la voluntad se disuelve pronto, cuando el lector se entera de que son varios “los autores que de este caso escriben” (I, 1); y poco después que esos autores divergen y que de ellos disiente el yo (“Autores hay que dicen que la primera aventura fue la de Puerto Lápice; otros dicen...; pero lo que yo he podido averiguar...”, I, 2). Y el mismo personaje imagina sus aventuras contadas por un autor supuesto “el sabio que las escribiere” (I, 2), etc. Desde las primeras palabras de la narración se está cuestionando el principio de autoridad; incluso desde antes, desde el mismo prólogo, donde el autor derrotado y en actitud melancólica se declara “padrastra” de la obra, y deja la escritura en manos de “un amigo mío gracioso y bien entendido”. ¿Y hay algo más moderno que la muerte del autor? ¿Quién escribe el Quijote? Una voz empieza a narrar y el lector se entrega a ella con la confianza de que será la encargada de guiarle en la aventura de la lectura; pero enseguida se quiebra esa confianza depositada, al confesar el primer narrador que son varios “los autores que de este caso escriben”; y poco más adelante la pérdida de la confianza es total cuando se interrumpe la acción porque se acaba la fuente de la que el primer narrador copia, y la

aventura del vizcaíno queda dramáticamente interrumpida y el lector en suspenso (lección que aprenden los folletines decimonónicos, y actualmente muchas series de televisión).

Pero está el daño de todo esto que en este punto y término deja pendiente el autor desta historia esta batalla, disculpándose que no halló más escrito de estas hazañas de don Quijote de las que deja referidas. Bien es verdad que el segundo autor de esta obra no quiso creer que tan curiosa historia estuviese entregada a las leyes del olvido, ni que hubiesen sido tan poco curiosos los ingenios de la Mancha que no tuviesen en sus archivos o en sus escritorios algunos papeles que deste famoso caballero tratasen; y así, con esta imaginación, no se desesperó de hallar el fin de esta apacible historia, el cual, siéndole el cielo favorable, le halló del modo que se contará en la segunda parte (I, 8)

El lector inicia el capítulo 9 completamente desconcertado, sin saber en quién confiar. Y a partir de ese momento asiste, al tiempo que el mismo primer narrador, que es ya también lector, como nosotros, al hallazgo del resto del manuscrito, obra de un autor árabe, Cide Hamete Benengeli, que escribe en su lengua propia, el árabe, y que por lo tanto es necesario traducir, y que se traduce mal o mentirosamente o vaya usted a saber cómo, y al que el narrador desautoriza no pocas veces, de forma que lo que el lector lee puede legítimamente ser cuestionado por el primer autor y el lector puede pensar que todo es mentira. Este artificio narrativo es importante en la vitalidad del texto, no por el mecanismo en sí (los libros de caballerías jugaban también al manuscrito encontrado), sino por el cuestionamiento de la verdad de lo narrado, por la ruptura de las relaciones de confianza entre el autor y el lector, que queda así como coprotagonista de la narración al tener que construir sus sentidos. El manuscrito encontrado pretendía autorizar la antigüedad de las crónicas; aquí sin embargo el recurso sirve para desautorizar la veracidad de lo contado, y para des-autorizar al texto, es decir, privarlo de la identificación inmediata de narrador y autor. Esta manera de convertir la narración en un juego de contar mentiras y de relativizar irónicamente lo contado es uno de los grandes inventos modernos de Cervantes para la novela. El oficio de Cervantes, el oficio del novelista es mentir. El destino del libro, que está a punto de provocar la locura de su primer narrador que busca desesperadamente la continuación del texto sigue siendo provocar la locura de sus lectores.¹¹ De la misma manera que Don Quijote enloquece leyendo, el libro de Cervantes juega a la posibilidad de hacernos enloquecer, anulando la relación de confianza entre autor y lector y desdibujando los límites entre lo real y lo ficticio (como en el personaje de Don Álvaro de Tarfe).

¿Quién escribe, entonces, el Quijote? El Quijote lo escribes tú, lo escribe cada nuevo lector (descubrimiento genial que Jorge Luis Borges ficcionaliza en su *Pierre Menard autor del Quijote*). El autor final del *Quijote* es ese “desocupado lector”, al que se interpela desde las primeras palabras propias de Cervantes que leemos cuando abrimos un ejemplar del Quijote; un lector al que se llama “queridísimo”, y al que se le recuerda que tienes “tu alma en tu cuerpo y tu libre albedrío... y estás en tu casa donde eres señor dela” (I, Prólogo). Es decir, el lector que tiene la libertad de interpretar de completar los huecos que deja la narración, de convertirse en un autor más añadido a la serie de autores que se van sumando a la autoría del texto, y que finalmente debe imponer sobre el texto su yo libre (“todo te exenta y hace libre...para decir de la historia todo aquello que te pareciere” I, Prólogo), cada uno desde su perspectiva vital y desde su condición personal: el melancólico, el risueño, el simple, el discreto, el grave, el prudente. “Tú, lector, pues eres prudente, juzga lo que te pareciere, que yo no puedo ni debo más” (II, 24) afirma el “yo” de Cide Hamete en la glosa al margen que escribe tras la aventura de la Cueva de Montesinos.

El Quijote no sólo ha derribado el concepto de autoridad, sino también el de ejemplaridad o moralidad impuesta y dogmática: es un territorio de libertad individual sin precedentes, una libertad no sólo consentida humanamente, sino fomentada con talante risueño desde el propio juego de “yoes” implicados: el del autor, el del narrador, el del personaje, que dialogan y se explican desde el “tú” del lector, dueño último de la narración y de su sentido.

3.- El otro: el diálogo.

¿A dónde hubiera llegado Don Quijote él solo, con su yo por el mundo? A los seis primeros capítulos de 1605, la cosa no daba para más. El Quijote avanza porque se inventa alguien con quien dialogar. Lo explicó muy bien el premio Nobel japonés Kenzaburo Oe: “El artificio literario de Don Quijote y Sancho contenía una fuerza demasiado grande como para terminar la novela sin más. La novela avanza con una vitalidad que brota de sí misma”.¹² Lo ha explicado más recientemente el escritor colombiano Fernando Vallejo: la diferencia fundamental entre el Quijote y el *Lazarillo* o el *Guzmán* de Alfarache es que estos personajes van solos, de aventura en aventura, sin interlocutor, pero

“El Quijote es un diálogo. Un gran diálogo entre Don Quijote y Sancho con la intervención ocasional de otros muchos interlocutores y con Cervantes detrás de ellos de amanuense o escribano, anotando y explicando”¹³

La teatralidad radical del Quijote es indicio de la importancia que cobra el diálogo como aportación esencial a la novela; pero no un diálogo a la manera socrática en que un maestro dirige las preguntas de los discípulos, o a la manera ciceroniana en que cada personaje sostiene unos principios; sino un diálogo auténticamente teatral, interactivo porque los personajes no aparecen hechos de una pieza, sino que se transforman en contacto unos con otros: por ejemplo, en la interacción del diálogo Sancho se “quijotiza”, se hace discreto,

“...Cada día, Sancho, -dijo don Quijote- te vas haciendo menos simple y más discreto.

- Sí, que algo se me ha de pegar de la discreción de vuestra merced (...) Que la conversación de vuestra merced ha sido el estéril que sobre la estéril tierra de mi seco ingenio ha caído... (II, 12)

Y muestra su discreción en el gobierno de la ínsula Barataria, o burlándose de sus burladores los Duques. En todas esas partes el narrador ha casi desaparecido en función del dinamismo teatral de preguntas y respuestas. Gran parte de la vitalidad que desprende el Quijote depende de su condición teatral, conseguida con un diálogo vivo, que transmite sensación de inmediatez y que incluso gana cuando se “interpreta” en la lectura en voz alta dramatizada. Por eso el episodio más teatral del Quijote, el del Retablo de Maese Pedro (II, 26) ha podido ser interpretado como una especie de célula que contiene el juego de relaciones de toda la obra: los personajes interactúan, entre sí y con relación a lo narrado, son actores y espectadores, como el lector se siente también espectador en el gran teatro del mundo que la novela representa. No deja de ser paradójico -y es también explicación de la modernidad y grandeza del *Quijote*- que la primera novela moderna, difumine desde el principio los límites de los géneros literarios y aprenda tanto y tan bien del teatro, desde *La Celestina* a Lope de Vega: esta mezcla ambigua de los géneros justifica la idea de que la primera novela moderna es también la primera novela postmoderna.¹⁴

La interacción del diálogo que transforma a los personajes nos pone en contacto con otro gran soporte

de la vitalidad del Quijote: la valoración de la experiencia del otro. Los personajes que cuentan historias (Grisóstomo, Cardenio, el capitán cautivo, Ricote, Ana Félix...) nos traen experiencias ajenas al desarrollo principal, experiencias que abren el mundo cercano a otros mundos; y esa apertura surte efectos transformadores y liberadores, porque “el ver mucho y el leer mucho aviva los ingenios de los hombres” (*Los trabajos de Persiles y Sigismunda*). Esa inteligencia del otro trae de la mano el perspectivismo, la variedad de los puntos de vista sobre la realidad (“y así, eso que a ti te parece bacía de barbero, me parece a mí yelmo de Mambirino, y a otro le parecerá otra cosa” (I, 25); puntos de vista que se resuelven en el acuerdo, en esa solución de compromiso, el “baciuelmo” que se inventa Sancho para satisfacer a todos (I, 44).

De la mano del diálogo entramos ya en el último gran valor de vitalidad del *Quijote* que quiero aquí y ahora destacar: el elogio de la diversidad y la tolerancia.¹⁵ Si la variedad era principio estético que valorábamos desde perspectiva histórica, el elogio de lo diverso y la aceptación tolerante del otro son valores de actualidad humana palpitante e imprescindible en este nuestro mundo globalizado y diverso. El Quijote es una obra de ahora mismo porque nos enseña los caminos de la convivencia tolerante con ironía, con humor y con risa, enseñándonos a reírnos de nosotros mismos y a respetar al otro: “la ironía es propia del hombre libre”, como recuerda Aristóteles (*Retórica* III, 1419b 9). Seguramente su propia experiencia vital le inspiró a Cervantes un espíritu tan distinto del que tradicionalmente se atribuye a la España de los Austrias y que literariamente representa un ortodoxo problemático como Quevedo: la intransigencia y la intolerancia.

Sea como sea, no cabe duda de que así como hay personas en cuya presencia uno se siente mejor persona, más en paz con el género humano, porque suscitan con su ejemplo sentimientos de generosidad, de amistad, hay libros con cuya lectura uno termina reconfortado, no desazonado, y se siente humanamente mejor. Creo que *El Quijote* es uno de esos libros, y en ese carácter radica su “santidad”, su lección permanentemente de humanidad. El juego del Quijote, el perspectivismo, la ironía, la risa no son sólo mecanismos técnicos, sino -y esa es su grandeza- herramientas para construir un canto de tolerancia, para la construcción de un mundo mejor y más libre; junto con un sentimiento noble de solidaridad en la derrota. Es lo que expresa magníficamente el final de la aventura de Clavileño en que los dos personajes se saben portadores de una realidad problemática (o mentirosa), pero se toleran cada uno en pacto de no agresión: “Sancho, pues vos queréis que se os crea lo que habéis visto en el cielo, yo quiero que vos me creáis a mí lo que vi en la cueva de Montesinos. Y no os digo más.” (II, 41). O la fábula de la amistad entre Rocinante y el rucio

“...cuya amistad fue tan única y tan trabada, que hay fama, por tradición de padres a hijos, que el autor de esta verdadera historia hizo particulares capítulos de ella (...) Y si esto es así, se podría echar de ver, para universal admiración... y para confusión de los hombres, que tan mal saben guardarse amistad los unos a los otros” (II, 12)

¿Cómo puede perder vitalidad una obra así?

Decía Francisco Rico recientemente¹⁶ -y no le falta razón- que para la interpretación del Quijote no basta la lectura del filólogo y la del historiador. “El éxito desigualado del Quijote viene de la fascinación que desde siempre ha ejercido la singular humanidad del protagonista y su escudero”. Si el *Quijote* es una obra que desde su contexto histórico participa del humanismo, desde el siglo XXI contribuye a construir nuestra humanidad.

En suma, ¿por qué debemos seguir leyendo el Quijote? Porque nos hace mejores, más humanos; y

porque nos da placer, nos permite seguir riendo a carcajadas (lo he comprobado con mis alumnos leyendo, por ejemplo, la vergonzosa aventura de los batanes I, 20, en la que Sancho pierde el respeto a su amo movido por imperiosas necesidades inesminables). ¿Y quién no tiene necesidad de reír? El espíritu carnal navaleco que alimenta al *Quijote* nos da esa válvula de escape de la realidad de la que tan necesitados estamos no pocas veces.

¿Cómo celebrar las efemérides cervantinas, no sólo este año, sino los venideros y por siempre? Leyendo esa obra milagrosa, obra que para Dostoiévski (*Diario de un escritor*) era ella sola capaz de educar la inteligencia de un adolescente. Leyéndola con humildad y cierta ironía lúcida, sabiendo que apenas nos estamos asomando a un parte pequeña del abismo de significados que encierra. Y siendo conscientes de que construimos en libertad nuestra comprensión actualizada del *Quijote* y de los otros desde nuestro propio mundo. En libertad siempre, porque, como recuerda don Quijote, que parece hablar aquí con el recuerdo de la experiencia terrible de cautividad de su creador

La libertad, Sancho, es uno de los más preciosos dones que a los hombres dieron los cielos; con ella no pueden igualarse los tesoros que encierra la tierra ni el mar encubre; por la libertad... se puede y se debe aventurar la vida. (II, 58)

Y termino con un deseo. Que también los recién cumplidos 40 años de esta Facultad de Lenguas Extranjeras y de este Departamento de Español sean, como el *Quijote*, una ventana al mundo de los otros, a la tolerancia y a la inteligencia en libertad. Y que cuando se celebren los 400 años de la Facultad, se pueda seguir festejando con su lectura la vitalidad del *Quijote* en el siglo XXIV.

Muchas gracias

ARIGATOO.

- 1 Miguel Pizarro, *Poesía y teatro*, Granada, Diputación de Granada, 2000.
- 2 «... que era muy dado a leer libros mundanos y falsos que suelen llamar de Caballerías... pidió alguno dellos para pasar el tiempo» (San Ignacio de Loyola, *Autobiografía*, I, 5). «Y como tenía todo el entendimiento lleno de aquellas cosas de Amadís de Gaula y de semejantes libros, veníanle al pensamiento algunas cosas semejantes a aquellas» (*ibidem*, II, 17).
- 3 Son muchas las lecturas de otros autores, cervantistas y no, que están detrás de esta mi lectura y que me han ido sugiriendo perspectivas y enfoques. Por interés del público cito solamente al paso algunas de las últimas aportaciones, que me han resultado más creativas y sugerentes. Muchas de ellas son de este último año, tan fecundo en estudios y celebraciones quijotistas.
- 4 Katsuyuki Ogiuchi, "Mi traducción del *Quijote* se podrá leer como un manga", *El cultural de El Mundo*, 6 de octubre de 2005.
- 5 Coincido con lo expresado por Jaime Fernández, "Cervantes en Japón", *Andes Cervantinos*, XXII, (1985), 200-211.
- 6 Para este concepto de "mundo transformado" ver Juan Ignacio Ferreras, *La estructura paródica del Quijote*, Taurus, Madrid, 1982.
- 7 Es, simplificada, la lectura que proponen Augustin Redondo, "La melancolía y *El Quijote* de 1605", en *Otra manera de leer el Quijote*, Castalia, Madrid, 1997, y recientemente Bienvenido Morros, *Otra lectura del Quijote. Don Quijote y el elogio de la castidad*, Cátedra, Madrid, 2005.
- 8 Sugerente perspectiva de estudio que se plantea a partir de las afinidades creativas de Góngora y Cervantes en Antonio Rey Hazas, *Poética de la libertad y otras claves cervantinas*, Ediciones Eneida, Madrid, 2005.
- 9 El primer caso, en montaje para la escena del Teatre Lliure de Cataluña, dirección y adaptación de Alex Rigola (2005); el segundo, en la película de Richard Loncraine (1995)
- 10 Hasta 61 versiones se recogen en la página web dedicada al *Quijote* en el cine: <http://www.uhu.es/cine/educacion/cineyeducacion/donquijote.htm> (consulta 3 / 11/ 05).
- 11 Juan Carlos Rodríguez, *El escritor que comió su propio libro para leer el Quijote*, Debate, Madrid, 2003.
- 12 Kenzaburo Oé, "Don Quijote, una cuestión personal", *ABC Cultural* 155 (1994), 16-18.

- 13 Fernando Vallejo, "El gran diálogo del Quijote", en *Babelia*, El País, sábado 10 de septiembre de 2005.
- 14 "Jorge Volpi, señala a Cervantes como el fundador del realismo", *El País*, 11 de noviembre de 2005.
- 15 Coincido de lleno con lo expresado recientemente por Claudio Guillén (conferencia en Lisboa, 20 de octubre 2005), recogida en *El País*, 21 de octubre, 2005 con el titular "Claudio Guillén elogia la tolerancia y la diversidad del Quijote".
- 16 Francisco Rico, "Tantos Quijotes", Babelia, *El País*, 15 octubre, 2005. Es reseña crítica del libro de Anthony Close, *La concepción romántica del Quijote*, Crítica, Barcelona, 2005.

第1回・第2回国際シンポジウム 「外国籍住民との共生社会の創造」報告

(横浜研究会)

Ⅰ. はじめに

本研究会は、横浜・神奈川地域をフィールドにして、1990年代以降ニューカマーの増加が著しい外国籍住民の状況と諸問題、ならびに日本人住民との社会的・文化的葛藤、交流の解明を通して、外国籍住民と日本人住民との共生社会創造の可能性と提言を追究するというテーマのもとに、2004年度から調査・研究を行ってきた。政治・経済・文化のグローバル化や少子高齢化が進むなか、21世紀の日本社会は変動を余儀なくされているが、この研究テーマは日本社会の変容や諸問題、さらに日本（人）とアジア・中南諸国（人）との今後の関係のあり方を考察する上で、主要なテーマとなると考えて設定した次第である。

幸いにして、本研究の一環として、04年度・05年度に国際シンポジウム「外国籍住民との共生社会の創造」を開催することができた。

04年度は教育重点予算のもとに、2005年3月29・30日に「在日KOREAN」「在日CHINESE」「中国帰国者」を対象にして、本学においてシンポジウムを開催した。本テーマにふさわしい中国・韓国・アメリカからの優れた研究者をはじめとして、横浜華僑総会長、在日大韓民国民団事務総長、日本人ボランテア等等の報告者をむかえて、「在日KOREAN」「在日CHINESE」「中国帰国者」の歴史的社会的経緯と日本（人）社会との共生に関する問題点を明らかにすることができた。参加者数は本研究会メンバー、報告者を入れて33名、32名と小規模であったが、このことがかえって活発な討論をもたらした研究を深めたと考えている。

05年度は「人間科学部」設置予定記念行事の一環として、「滞日LATINOS」の状況および外国籍住民の「人権」問題を取り上げて、05年11月26・27日に神奈川大学KUボートスクエアーで開催した。本テーマにふさわしい研究者や弁護士、滞日LATINOS向け新聞記者、神奈川朝鮮学校長、NPO代表者などの報告と討論を通じて、事実認識や問題の所在が一層深められた。参加者は67名、53名と昨年度を上回る状況となり、本研究会の研究会活動が広く社会的に認知されはじめてきていると思われる。

研究活動の一環として、2年連続して国際シンポジウムを開催することができたのも、学長及び理事会の御理解、御配慮の賜物とお礼申し上げます。また、2回にわたるシンポジウムの報告者の中に2名の本学卒業生がおり——このことはまったく偶然で当日分ったことですが——、卒業生の活躍の一端を見ることができ、うれしく思いました。最後になりましたが、シンポジウムで御報告いただいた皆様に改めてお礼申し上げます。(横倉節夫)

II. 第1回国際シンポジウムの概要

第1回国際シンポジウム：「外国籍住民との共生社会の創造」

——「在日KOREAN」「在日CHINESE」「中国帰国者」の場合——

主催：神奈川大学人文学研究所「外国籍住民との共生社会の創造」研究会

日時：2005年3月29～30日

場所：神奈川大学構内（17号館215会議室）

第1日：「在日KOREAN」「在日CHINESE」について主に韓国・中国の最近の経済・社会状況と渡日事情を中心に議論する

午前10：00～10：15〈主催者（当研究会）によるシンポジウムの趣旨説明〉

午前10：15～12：45〈韓国経済・社会の現状と「在日KOREAN」の渡日事情〉

報告者1：韓国・仁川発展研究院，行政室長 崔源九氏

報告者2：在日本大韓民国民団事務総長 鄭夢周氏

午後14：00～16：40〈中国経済・社会の現状と「在日CHINESE」の渡日事情〉

報告者1：上海社会科学院世界经济研究所 副教授 孫 震海氏

報告者2：T & T社 事業部長 松本文夫氏

報告者3：中国帰国者定着促進センター 小林悦夫氏

午後17：00～18：00〈全体討論とまとめ〉

夜18：00～ 〈懇親会〉

第2日：「在日KOREAN」「在日CHINESE」の生活、その歴史と現状を中心に討論する

午前10：00～12：30〈横浜（神奈川）における「在日KOREAN」「在日CHINESE」のコミ

ュニテイの歴史〉

報告者1：横浜華僑総会長 曾 徳深氏

報告者2：在日朝鮮人問題研究家 呉 圭祥氏

午後13：30～16：00〈在日KOREAN」「在日CHINESE」「中国帰国者」の現状〉

報告者1：勸 壽隆氏

報告者2：楊 筱蓉氏

報告者3：ユツカの会 中和子氏

報告者4：シアトル大学講師Robert Efrid氏

午後16：20～17：20〈全体の討論とまとめ〉

夜17：30～ 〈懇親会〉

(1) 第1日——「在日KOREAN」「在日CHINESE」について韓国・中国の最近の経済・社会状況と渡日事情

午前の部 韓国経済・社会の現状と「在日KOREAN」の渡日事情

報告者と報告タイトル

①韓国経済・仁川発展研究院 崔源九氏「経済危機以降の韓国経済」

②在日本大韓民国民団事務総長 鄭夢周氏「在日KOREANの渡日事情」

報告概要①

第一報告者の崔源九氏から「経済危機以降の韓国経済」と題して、1997年の経済危機の政治経済状況の説明並びに今日の韓国経済状況と課題についての報告があった。

まず、97年の経済危機の原因として非効率的な韓国経済システムにあったと総括された。86年の民主化運動を契機として、韓国の政治は大きく民主化が進展したものの、金融機関の改革をはじめとする経済システムの改革は進展せず、政治と不可分の財閥の相互保証制度等により専横する経済システムは従前のままであった。このことが、国際市場動向を顧みない一部の財閥の意思決定と過剰投資を金融機関が事実上一体となって推進することになり、未曾有の不良債権を生み出すことになった。このような経済システムの非効率性が韓国経済の通貨危機の背景にあったことが説明された。

次に、98年のIMF勧告以降劇的に韓国の経済システムの改革が進展したことが説明された。IMFの管理下に入ることにより、相互保証制度の禁止をはじめとする財閥優遇策の見直しとともに一定の市場経済のルール化などが図られた。その後、99年以降順調に経済は回復し今日に至っている。

ただし、現政権下において、労働政策や企業政策が企業活動を萎縮させ国の競争力を低下させているとの課題が指摘されている。特に、民主労働組合系をはじめとする労働組合の力が強く、一部には「労働貴族」と揶揄される状況であることが説明された。

最後に、近年日本への留学と日本企業への就職希望者は減少しており、代わりに中国指向の学生が増えていることの紹介があった。

報告概要②

第二報告者の鄭夢周氏から「在日KOREANの渡日事情」の統計資料付きレジュメとパンフレット「全同胞の心をひとつに明るい在日同胞社会を」とともに在日KOREANをめぐるミクロとマクロの両視点から多民族共生社会をめざした以下のような報告があった。「なぜ在日KOREANが日本に」では、歴史的に植民地以降を時系列的に説明された。一例として、敗戦時には強制連行約66万人、軍人軍属が37万人余りと報告された。

「在日KOREANの人口動態」では、戦後60年、なぜ61万3千人か？との副題で、1. 45—46年の大量帰国、2. 北朝鮮への帰国、3. 国籍変更、4. 婚姻による減少、5. 少子化の影響についてそれぞれ報告された。

「外国人（在日KOREAN）の存在」では、日本の国際化のバロメーターとの副題で、1. 日本における外国人の特徴、2. 外国人の地位、3. 在日KOREAN：61万3千人について報告された。

「在日KOREANの問題」では、1. 20世紀の世界の課題から（20世紀の世界の課題（三重苦）とともに）、2. 偏見と差別はいつから：日本の近代史の存在そのものが知られていない、3. 人権問題と同義語——「人権教育のための国連10年」の重要課題——、4. 克服への努力について報告された。

「多民族共生社会をめざして」では、——世界の中の日本、アジアの中の日本を——を副題に、1. 「だれもが」「安心して」「豊かに」生きるために、2. 一人一人の心の問題、3. 人間尊重、人間復興の世紀となることを……しかし、新たな対立が、について報告された。

全体を通じて、マクロの視点として、日本の発展に寄与する在日同胞の視点が示された。日本は、在日KOREANの人々の人権を確立することにより、人権先進国としてアジアで真のリーダーシップを発揮することになり、一方、在日同胞は、帰化せずに在日KOREANとして生きていくことにより、日本の内なる国際化に寄与する存在となる、との考えが示された。さらに、ミクロの視点からは、一人一人の心の問題として、「違い」を認め合うことから始めることの重要性が確認された。

最後に、不幸な歴史のみでなく歴史的な文化交流もなされてきたこと並びに在日KOREANの人権を尊重するように日本社会と日本人の意識も変化している現状について報告された。これらの萌芽が各人が進展させることによって、日本社会とアジアの平和に連なることが確認された。

質疑応答

以下の質問があり次のような回答がなされた。

質問 (無職) 「朝鮮」という言葉について

回答 (鄭氏) 「朝鮮語」から「ハングル語」のように変わってきているが、日本政府としては

「韓国」という言葉についてのもう少し配慮が必要。

回答 (崔氏) 「朝鮮」について特に悪いイメージはない。

質問 (教師) 韓国の小学生は日本が好きか否か

回答 (鄭氏) 愛憎相半ばしている。

回答 (崔氏) 教育とマスコミの影響力が大きい。日本は嫌いだけど日本人は好き。

質問 (ライター) サッカーの試合で見た韓国の北朝鮮に対する感情について

回答 (鄭氏) サッカーの試合等は特殊な状況であり過激な応援を一般化して論ずるのは危険である。在日と韓国では北朝鮮に対する感情は少し違う。

回答 (崔氏) 若い人は北朝鮮に悪いイメージがない。韓国のテレビも好意的である。

なお、フロアから、進歩的知識人とされる人達が北朝鮮を擁護してきたことが、「拉致問題」をはじめとする北朝鮮を取り巻く様々な問題の解決を未だに困難にしていると思うが、これについて大学の研究者はどう思っているのかとの質問がなされた。

これに対して、主催者側の横倉から、同感するところがあります、多様な問題意識を持ってこのシンポジウムを活用して議論を深めていただきたい旨の発言があった。

また、これに関連する回答として鄭氏から、94年に横田さん夫妻が相談に来て以来、政治的に利用されないように留意しつつ民国として可能な限り助力を続けている、また、北朝鮮から70人程度日本に来ていいるがこれらにも援助している、とのことであった。

(兼子良夫)

午後の部 中国経済・社会の現状と「在CHINESE」の渡日事情

午後の部では、1990年代以降成長の著しい中国経済と社会状況、これに伴う「在CHINESE」(ニューカマー)の渡日事情、さらに「中国帰国者」の実態について報告、討論を行った。

報告1. 上海社会科学院副教授 孫震海氏「幾つかの側面から、上海及び中国の経済発展と社会状況を見る」要旨

中国経済は沿岸部を中心に成長が著しいが、そこにはいくつかの問題点がある。その第1は中国経済が「外向型経済」という構造をもつ点である。このことは、中国が世界の工場になったとはいえ国外市場を中心に展開していることと、外資の利益の吸収による中国企業及び労働者の損失や沿岸部地域間たとえば珠江デルタ地域の熟練労働力不足問題の生起をもたらししていること、の2つの問題を生みだしている。第2はエネルギー・資源の海外依存が高くなっており、沿岸部では電力供給も厳しい状況となっている。こうした中で、上海市では経済・貿易・金融・「航」運の4つの中心をめざしており、「航」運についてはその整備も進んでいる。しかし、この中心は、国内の中心なのか、アジア太平洋地域の中心なのか、世界の中心なのか、またその整備を段階的に推進していくのか、など結論はでていない。さらに、上海では「総部経済」概念がブームとなっているが、その明確な定義はなされていない。しかし、その特徴として、巨大多国籍企業の地域本部あるいは特定の機能を担当する本部を誘地して、上海市を産業連関の最高の部分におくこと、そして税金を増やすこと、があげられる。以上の問題点をかえながら、また2010年の上海万博以後の持続的な発展をどのようにすべきかの問題を考える必要があるが、中国さらに上海市の経済は拡大している。これに伴って、日本人の華東地域での長期滞在は4.4万人に達しており、逆に中国人の渡日も増加している。中国人の渡日は、「留学」と日本企業への「就職」

が大きな要因である。留学生は一人っ子政策もあって私費留学生が増えており、また大学卒生を中心に日本企業に「就職」して渡日する者も増えている。また今後は、日中両国で事業にたずさわる者も増えるだろう。

報告2. T & T社 松本文夫氏 「中国連携ビジネスと中国技術者の在日状況」 要旨

当社は情報システム構築事業を主な事業としており、1992年に中国・上海に合弁企業を設立した。中国との連携ビジネスは、全体的なコストダウン、中国の優秀な技術者活用による技術力向上などによるが、設計は当社、製造は合弁会社と役割分担をしている。日本での受注増加や中国への日系企業の進出に伴う受注増加によって、当社でも中国人技術者を採用、活用している。この中国人技術者を日中両国語ができ、設計と製造の橋渡し役となるブリッジSEに育成して活用する方針のもとに、日本語教育と技術教育を行っている。中国で6ヶ月日本語教育を行い日本語3級レベルに達すると、当社は正式に雇用契約を結び、日本で教育を行う。この時、長期ビザを取得させ、来日後2年で日本語1級レベルにまで上げ、さらに技術面では配属したプロジェクトの管理者・リーダーによる教育を行っている。賃金は基本的には日本人と同等扱いであり、日本語・技術面のレベルの高い技術者は平均的な日本人社員より高くなる場合もある。中国人技術者は数年は日本で仕事をし、その後中国へ戻って合弁企業でブリッジSEの仕事をしてもらうことを考えている（一部帰化する技術者も出ることを予想している）。日本での生活は、当初会社の寮に居住させているが、2年ぐらい経過すると1人で住みたい等の理由で、アパートに移っている。生活面でのトラブル（油で流れの排水口を詰らせたり、ゴミ出しなど）はあるが、仕事に対しては熱心であり、自分のスキル、キャリアパスに関して向上心が高い。ただし、条件の良い企業に突然転職する者もいる（退職率10%）。今後も当社では中国人技術者を採用・活用する方針である。

報告3. 中国帰国者定着促進センター 小林悦夫氏 「中国帰国者の実態」

「中国帰国者」は、戦前に満洲国に満蒙開拓団として渡った日本人のうち、戦後の引き揚げ後も残った人達、つまり「残留孤児」「残留婦人」で帰国した本人及びその家族をいうが、現在まで国費で帰国した人数は約2万人である。しかし、その他に「よび寄せ家族」「養父母」もあり、その人数は国費で帰国した人数の4～5倍いとみられる。現在、「孤児」の年齢は60歳代半ば、「婦人」は70～80歳代であり、その2世、3世、4世もいる。日本社会定着のプロセスは、国費での「帰国者」の場合、埼玉県と大阪府にある定着促進センターで6ヶ月の研修（日本語や生活習慣等）を受けた後、各地の定着地で居住しながら、全国12ヶ所ある第2次センターで8ヶ月間学習する。1世の場合、非あるいは半識字者が多く、また年齢要因もあって日本語の習得は困難であり、2・3世の方が習得は早い。さらに第3次センター（東京・大阪・福岡）では、「よび寄せ家族」も対象となっており、ここでは通信教育とスクーリングが行われている。最後に、定住型外国人問題で日本語習得や生活習慣等で最初に問題を示したのは「中国帰国者」であり、その後ニューカマー問題への対応でそれが役に立っている点や、日本企業の受入れ体制の不整の点が指摘された。

以上の報告のあとに、質疑・討論がなされたが、簡単に記しておく。中国では政治は共産党支配、経済は日本以上に資本主義的であるが、中国人は政治と経済を異なる体制と考えているか、また中国国内の格差は解消するのか、という問題で、孫氏から経済発展のためには政治の安定が不可欠であること、格差解消はすぐには困難である、との回答がなされた。「中国帰国者」では、小林氏から報告を補足する形で、定住地が東京・神奈川・大阪の大都市圏の他に出身地である長野や東北各県などにちらばっている点や、1・2世の就職困難や経済的困難（年金がでない等）、さらに子供の言語習得とかかわって学習言語として中国語を母語として学習し、日本語は第2言語とすることが望ましいこと、が指摘された。この他に、今後日系企業は労働組合を重視すべきとの意見も出された。

(横倉節夫)

(2) 第2日目——「在日KOREAN」「在日CHINESE」の生活、その歴史と現状を中心に

まず千前の部では、横浜・神奈川地域におけるその伝統的なコミュニティについて報告されたが、横浜華僑総会長菅氏による横浜中華街の報告の概要は以下の通りである。今日、横浜中華街といえはレストラン経営が目立つが(500店舗のうち240がレストラン)、戦前は10数軒にすぎなかった。開港時に中国人は経済的理由によって移住してきたが、職業も多様であった。しかし、日本人の職業に影響を与える職業の禁止や関東大震災によって打撃をうけ、戦後は焼け野原の中から復興してきた。レストランが一挙に増加したのは1972年の日中国交回復後であり、同時にこの時期に台湾系住民の帰化が増加した。現在、大陸系と台湾系住民がいるが、政治的に対立している面もあるが(共産党・国民党の対立、しかし国民党も台湾独立となると大陸系に近寄る)、文化的アイデンティティは同質であり、関帝廟の再建や街づくりで協力しあっている。とはいえ、2つある中華学校は漢字が違うため1つにするのには無理がある(1946年に学校は再建されたが、52年に2つに分れる)。また、横浜・神戸・長崎はオールドカマーの街であり、ニューカマーは池袋等に集中しており、オールドカマーとニューカマーの接触はほとんどない。中国人と日本人の共生は、互いに耳をかたむけ忍耐することから始まる。

ついで呉氏の報告は、「在日コリアン」という用語を、植民地時代に日本にきた人とその子孫、本国の民族の1構成員である、という2つの点で理解してほしい、いう点からはじまり、在日コリアンの発生、形成・展開が語られた。そして、在日コリアンコミュニティを支える理念として、祖国の統一、日本永住化に伴う生活権利擁護があり、その手段として、朝鮮総連等の同胞団体、朝鮮学校を中心とする民族教育等がある。今後の課題としては、世代交代や意識の変化、祖国・民族との隔離が進む中で、いかにして民族的アイデンティティを維持発展させ、コリアンコミュニティを存続させるか、があげられる。また、日本社会と共生する同胞社会の構築、つまり差別の是正や日本における多文化共生社会への寄与も今後の課題として語られた。

(横倉節夫)

第2日の午後の部では4名の報告者がそれぞれ異なった立場から「在日KOREAN」「在日CHINESE」「中国帰国者」の現状について報告した。

勅隆氏は、在日大韓民国国民青年会中央本部会長を務め、また、県立高校の教員として韓国語を教えておられる。勅氏はオールドカマーの一員としての自己の成長の過程を振り返りつつ、在日KOREANの子供や青年をとりまく環境と制度、子供の目からみた将来への見通し、アイデンティティの持ち方など、オールドカマーの青少年に関する現状について報告した。

楊筱蓉氏は、16年前に留学のために来日した日CHINESEのニューカマーとしての立場から、外国籍住民自身の日本社会への参加に関する報告を行った。楊氏は現在国際交流ラウンジや高校などで中国語を教えつつ、医療通訳派遣コーディネーター兼通訳、横浜市男女共同参画推進審議会の委員などの地域活動にも積極的に参加しておられる。

中和子氏は、ホスト社会側の立場から、横浜での外国籍住民や中国帰国者への支援の現状について報告を行った。中氏の参加するボランティアグループ「ユッカの会」では、中国帰国者をはじめ、国籍も年齢も実に多様な外国籍住民を対象として支援活動を行っている。横浜市内や神奈川県内で行われている成人を対象とした日本語学習支援、外国にルーツをもつ子供の学習支援や進学に関する相談、外国から帰国した(あるいは移り住んできた)お年寄りの生きがい作り、さまざまな行事を通じた地域での交流活動、多様な生活支援について、現状が報告された。

最後に、シアトル大学のRobert Etind氏が研究者の立場から外国籍住民の現状と市民活動による支援について報告を行った。外国籍住民の子供たちにとっては居住所づくりも重要であるが、横浜市内において行われているホスト社会側の日本人の若者による支援についての調査報告があった。

このセッションには、当事者である外国籍住民の立場からはオールドカマーとニューカマーが、ホス

ト社会側からは外国籍住民に対する支援者が、さらに横浜をフィールドとして調査を行ってきた研究者が一同に会し、それぞれの視点で共生社会としての現段階の報告を行うことができた。この点に大きな意義があったと考える。外国籍住民といっても様ではない。オールドカマーに代表されるように母語が日本語である外国籍住民もいるし、逆に中国帰国者や日本人と結婚した外国人のように、現時点の国籍は日本であっても外国にルーツをもつために日本語が不自由な人もいる。年齢から見ても、外国籍住民には幼児からお年寄りまでがいて、直面している問題や社会参加の仕方、アイデンティティの問題などはそれぞれに異なる。こうした点はややもすれば見逃されがちであるが、本セッションを通じて、共生社会の創造に向けて多様な視点からの検討が必要であることを改めて確認することができたように思う。

(富谷玲子)

III. 第2回国際シンポジウムの概要

第2回国際シンポジウム：「外国籍住民との共生社会の創造」

(人間科学部設置予定記念)

～「滞日LATINOS」と外国籍住民の「人権」問題を中心に～

主催：人間科学部（設置予定）、「外国籍住民との共生社会の創造」研究会

記

日時：2005年11月26日（土）～27日（日）

場所：神奈川大学みなとみらいエクステションKUPোর্トスクエア

(横浜みなとみらい地区、クイーンズタワーA, 14F)

第1日：「滞日LATINOS」の諸問題について議論する

午前10：00～10：10 主催者挨拶

10：10～12：40

報告1. 「顔のみえない定住化」 首都大学東京講師 丹野清人氏

報告2. 滞日ブラジル人と「多文化共生」 IPC編集部長 鎌田フナツ氏

午後13：40～16：00

報告1. 藤沢市における多文化理解教育の可能性 文教大学助教授 山脇千賀子氏

報告2. 滞日中南米人の身近な問題 IPC記者 堀口江利氏

16：10～17：00 討論

第2日：外国籍住民の「人権」問題について議論する

午前10：00～12：30

報告1. 「在留資格」を欠く子どもたち かながわ外国人教育相談 高橋徹氏

報告2. 日本の出入国管理制度をみつめる 弁護士 関聡介氏

午後13：30～16：00

報告1. 民族教育の現状と課題 神奈川朝鮮学校長 禹載星氏

報告2. 子どもの教育権 ARC代表 平野裕二氏

午後16：10～17：00 討論

(1) 第1日——「滞日LATINOS」の諸問題について

これまで、在日外国人との共生問題については、主に法制度等の受け入れ体制不備の是正の問題として、あるいは異文化理解、多文化主義、「グローカリゼーション」という言葉に代表される文化の変容や相互浸透といった観点から論じられることが多かった。しかし、日本に在住する日系人労働者は他の在日外国人とは異なる固有の特徴を備えている。そこから、「共生」問題を議論するためのあたたかな視座の必要性が浮かび上がってくる。

日系出稼ぎ労働者が急増したのはバブル経済期の1990年の入管法改定による。この改定によって日系人の単純労働就労が可能になり、その多くが下請け企業に雇われたため、居住区も名古屋、静岡、群

馬など中部地方や関東地方に集中した。この集住性も彼らの重要な特徴である。現在、その数は、ブラジル人を中心に、ペルー人、ボリビア人など、30万人を超える。

これらの人々は一般的には、ブラジル人、ペルー人というように国籍で呼ばれることが多いが、今回のシンポジウムでは「滞日ラテイノス」という呼称を使った。それは、90年の改正入管法では日系人という限定が設けられているものの、配偶者の就労も可能であり、また、戸籍の偽造等により入国する者も少なくないからである。また、そこには、デカセギのため帰国を前提として来日しながら、滞在が長期化しているという意味も込められている。

滞日ラテイノスは業務請負業者の手で来日し、日本企業に労働力として手配される。これがアジア人等の他の資格外就労者とは大きく異なる特徴であり、そこから彼ら固有の悩みや問題も出てくる。そこだけではなく、彼らはバブル経済崩壊後に成立した新たな雇用構造にうまくスタビライズされている。これは日本人自身の雇用問題にも重大な影響を及ぼす。

そこで今回のシンポジウムでは、この固有の就業形態を基礎に据え「共生」について考えるという観点から、プログラムを以下のように設定した。

- 報告 1 首都大学東京講師 丹野清人氏 「顔のみえない定住化」
- 報告 2 I P C編集部長 鎌田フナチマ氏 「滞日ブラジル人と“多文化共生”」
- 報告 3 文教大学助教授 山脇千賀子氏 「藤沢市における多文化理解教育の可能性」
- 報告 4 I P C記者 堀口江利氏 「滞日中南米人の身近な問題」
(I P C紙は滞日日系人向けの週刊紙で、ポルトガル語版とスペイン語版がある)

丹野氏によれば、業務請負業者によって各企業に「手配」される滞日ラテイノスは、企業の必要に応じて自由に増減できる、極めてフレキシブルな労働力である。彼らは請負業者と契約を結ぶのであつて、日本の企業とではない。企業にとって彼らは「人数」としてしか捉えられない、「名前のない」労働力なのである。「顔の見えない定住化」とは、まずのこのことを指す。

それだけではない。彼らは使い捨ての労働力であり、しかも、日本人が就労しながらない職種や時間帯を埋めるために雇用される。就業時間は深夜や週末にも及ぶため、近隣の住民すら接触する機会は少ない。そればかりか、請負業者は多数の企業と契約し、企業側の要請があればどこにでも労働力を派遣する。そのためラテイノスの就労先は日本企業側の需要次第でめまぐるしく変わり、居住地を転々とすることになる。

このような極めて不安定な就労形態のもとで、彼らは「帰りたいのに帰れない」まま、5年、10年と長期間、滞在することになる。

鎌田氏は、滞日ラテイノス向け週刊紙I P Cの編集長としての経験から、主にブラジル人について報告した。なかでも滞在期間の長期化については、高齢化の進行、2世のアイデンティティ分裂による生活の退廃など新たな問題が発生し、深刻化しており、定住するか否かを決定する時期に来ているという。しかし、日本は外国人労働者にたいする「社会的排除」の国であり、滞日ラテイノスの「ゲットー」の形成が懸念される。そうなれば「社会的爆発」は避けられない。

山脇氏はペルー人やブラジル人などが集住する藤沢市における外国籍児童への教育の取り組みについて明らかにしたが、日本における教育現場の状況はきわめて不十分であり、「先進的」とされる藤沢市ですら教員やボランティア団体などの個人的取り組みに支えられている。しかも、ほとんど日本語指導に限定されており、教育方法の確立や教育システムの整備が急務であるにもかかわらず、行政の意識は希薄である。

これまで下請け企業の期間工に集中していた滞日ラテイノスも、バブル経済崩壊後は弁当屋や魚介類の処理等々、職業が多様化しており、それとともに居住地域も従来にはほとんど在住者のいなかった

県や町村に拡散し始めており、その分、学齢期のラティーンス児童の数が少なくなる。そうなれば、教育の場での取り組みは悪化せざるを得ない。

ＩＰＣ紙のスペイン語版記者である堀口氏は、日常の取材や日々新聞社に寄せられる身の上相談から得られた、ペルー人やボリビア人などの出稼ぎ者の生活状況について具体例を提示した。病気の家族を抱えながら保険料が支払えず国民健康保険を脱退する、自動車の強制保険に加入できないため交通事故を起こした場合に被害者に賠償金が支払われない、離婚による母子家庭が増加している、デカセギにより家族が解体しており母国に戻れない等々……、生々しい現実から「社会的爆発」が醸成されつつあることが明らかになった。

日本人自身の雇用への影響について、丹野氏によれば、現在のところ、日系請負労働者と日本人労働者との住み分けは一定、維持されている。たとえば期間工であっても日本人には正規雇用や賃上げなどへの道が開かれているが、業務請負業者を通じて「手配」されるラティーンスにはその可能性は無い。だが2004年４月の派遣労働者法改定後、従来外国人労働者を使っていた深夜労働に日本人女性の配置が増えており、また、日本人と滞日ラティーンスの賃金格差は徐々になくなり始めている。

教育問題に実践的に取り組んでいる山脇氏は外国人への施策が日本社会を変えようと主張する。これは教育に限られない。バブル経済時代にいわゆる３Ｋでの労働力不足を補うために導入された日系出稼ぎ労働者は、バブル経済崩壊後、とくに「構造改革」による雇用構造の変動のなかでうまく利用されてきた。しかし、丹野氏の調査で明らかのように、日本人の労働条件が対ラティーンスに接近しつつあるとすれば、外国人移住者を「他者」として捉えた従来の「共生論」を超えることが求められる。

(後藤政子)

(2) 第2日——外国籍住民の「人権」問題について

2日目は「外国籍住民の『人権』問題について議論する」という共通テーマのもとに、午前、午後、それぞれお二方の専門家からご報告をいただき討論を行なった。午前は在留資格をめぐる諸問題、午後には教育問題に焦点を当て、現状の把握と共生社会の創造に向けた今後の課題を論ずることが2日目の企画の趣旨であり、充実した報告と討論により所期の目的は達成されたものと自負している。

以下、報告順に従って、その概要と意義を報告する。

1 高橋徹「在留資格のない子どもたちと家族」

「かながわ外国人教育相談」で豊富な実務経験を積み重ねてきている高橋氏は、在留資格のない子どもたちがなぜ生ずるのかについて法的な背景説明を行なうことから報告を始めた。中国人帰国者の呼び寄せ家族・継子・養子、日本人もしくは永住者の継子、超過滞在者の子ども、難民申請者の子ども、と4つの場合に分けて具体的に説明がなされた。在留資格の欠如は摘発・収容さらに送還にまで直結するのだが、高橋報告は次いでその実態を具体的な数字をあげながら動的に描写する。現職の高校教員でもある高橋氏は、最後に、在留資格のない子どもたちへの学校や地域の支援を広げる際の問題点、その克服の方法を論じた。在留資格がないことは違法だということ、したがってそうした違法な存在の人々を支援することはできない、という思考に対して、在留特別許可を求めることはなんら違法ではなくむしろ法にかなった行動であり、子どもたちにはそもそも罪はない、といった対抗的思考を提示することで事態が開けるという指摘がなされた。この対抗的思考は運動を支え広げる論理として非常に重要である。また、討論の際に、非正規滞在者の存在を通報する義務は私人にはないこと、さらに、公務員についても本来の行政目的を達成できない場合には通報は控えるようになっていくということが紹介された。

2 関聡介「日本の入国管理制度を見つめる～厳しさを増す出入国管理制度と問題点」

日本の出入国管理制度について詳しい弁護士関氏は、日本の入管実務が厳しさを増していることを、多くの資料を提示しながら実証的かつ説得的に論じた。法令の概要、裁判例の変遷などがわかりやすく

解説されるとともに、特に興味を呼んだのは、2000年の第2次出入国管理基本計画と2005年の第3次出入国管理計画とのコントラストである。「出入国管理行政の主要な課題と今後の方針」について第2次計画は「1 国際化と社会のニーズに応える外国人受入れの円滑な実現」となっていたところ、第3次計画ではそれが「我が国が必要とする外国人の円滑な受入れ」になり、さらに、「3 学術・文化・青少年交流の推進と留学生・就学生の積極的な受入れ、4 長期にわたり我が国社会に在留する外国人の定着の円滑化」が「4 留学生・就学生の適正な受入れ、6 長期にわたり我が国社会に在留する外国人への対応」へと変わったことが指摘された。また、「不法滞在者への現実的かつ効果的な対応」も「強力な水際対策の推進及び不法滞在者の大幅な縮減を通じて我が国の治安を回復するための取組」に改まるなど、管理の強化に重点が移行していることをはっきりと映し出す箇所が丁寧に解きほぐされた。今後は「テロ対策」をキーワードに様々な対策が出てくることへの懸念も表されている。関氏はまた、教育や医療を含む、在日外国人をめぐる諸問題の所在を明らかにし、最後にマスコミや弁護士会の動きを紹介して報告を終えた。「民族教育・多文化共生教育」と「同化」のかかわりをどう捉えるべきかなどについて、関報告に触発されフロアーから意見が述べられた。

3 禹載星「正しい歴史認識と真の友好親善の確立——神奈川朝鮮学園60年の歩みと今日的課題」

神奈川朝鮮中高級学校長である禹載星氏は、なぜ多くの朝鮮・韓国人が日本に住んでいるのかについてその歴史的事情から報告を始め、「在日」朝鮮・韓国人が現在にいたるまで日本の保護・保障を受けられないままに來ていること、そして朝鮮人に対する負のイメージが戦争・植民地支配への責任を放置してきたことに由来する旨を説いた。禹報告は次いで、民族教育を守ろうとする人々の運動が朝鮮人学校の設立につながったことを確認しながら、現在においても朝鮮人学校が教育基本法第1条の私立学校として認められないなど、差別的処遇を受け続けていることを明らかにする。もともと、地元自治体(神奈川県、横浜市)は日朝関係が冷え込んだときであっても朝鮮人学校に好意的な姿勢を崩さず、側面から支援を一貫して提供していることで、東京都とはだいぶ状況が違うようである。また、近隣の地元中高校との交流などを通じ、朝鮮人学校が地域の一員として確固たる認知を受けていることも明らかにされた。禹氏は最後に、日朝間の友好親善関係確立の意義を訴えて報告を終えた。報告後の討論では、朝鮮人学校のカリキュラム(たとえば歴史教育や語学教育など)の実態についての質問があり、これに対する応答などを通じ、朝鮮人学校への理解がいくそう深まった。少なからぬ参加者がそのような感想を口にしていた。

4 平野裕二「外国籍の子どもの学習権／教育に対する権利」

子どもの権利のために闘うNGO・ARC代表の平野氏は、子どもの権利条約や社会権規約(経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約)などに定められた子どもの権利としての学習権の権利内容をまず解説した。特に社会権規約委員会の一般的意見13(1999年)を素材に、この権利が多様な側面をもつことを解き明かしたのだが、その中で、受入れ可能性の見地から「学習過程および教育方法を含む教育の形式および内容は、生徒にとって、および適切な場合には親にとって受入れ可能なものでなければならぬ」ことが指摘され、適可能性の見地から「教育は、変化する社会および地域のニーズに適合し、かつ多様な社会的・文化的環境に置かれている生徒のニーズに対応できるよう、柔軟なものでなければならぬ」ことが指摘されたことは、朝鮮人など外国人の子どもの教育を考えるうえで特に重要なことと思われた。また子どもの権利条約29条は教育の目的に関して「児童の父母、児童の文化的同一性、言語及び価値観、児童の居住国及び出身国の国民的価値観並びに自己の文明と異なる文明に対する尊重を育成すること」や平和・友好・平等意識の涵養を強く求めていること、こうした観点から、近時の教育法「改正」への潮流が国際法的に重大な問題を孕んでいること、同時に、民族教育などへの配慮が欠かれないことが説得的に論じられた。朝鮮人学校の差別的処遇について、人権条約の履行を監視する国際的機関から繰り返し非難がなされ是正が勧告されていることも紹介された。

以上の報告を踏まえ、最後に全体討論が行なわれた。ここでは、日本における外国人の管理が、とりわけ出入国管理の場面で強化されてきていることや、教育面での統制が進んでいることが確認され、しかしその一方で、国レベルだけに目をやっていたのでは視野に入らない風景・可能性が自治体や市民の間に広がっているという大切な指摘もなされた。報告者のみならず、聴衆として参加していただいた多くの方々から貴重な意見や情報提供があり、活発な意見交換のうちに討論を終えることができた。

(阿部浩己)

共同研究奨励金グループ活動報告書

「多文化共生社会の創出と日本社会の変容 —— 神奈川県横浜地域を中心に ——」 研究活動報告

1. 横浜研究会 (横倉, 永野, 後藤 (政), 平井, 寺沢, 福島, 富谷, 尹 (亨), 後藤 (晃), 兼子, 大里, 孫, 阿部)

2. 研究会・シンポジウムの開催

(1) 研究会

○第1回研究会 05年7月6日 基本科目共同研究室出席—横倉, 永野, 後藤 (政), 阿部, 秋の国際シンポジウムの企画について

○第2回研究会 05年8月30, 31日 京急上大岡「ウイリソング横浜」福祉保健研修交流センター出席—横倉, 永野, 阿部, 後藤 (政), 兼子, 富谷, 平井, 福島, 尹 (亨)

8月30日 午後1時30分～午後5時 ○05年3月末のシンポ (拡大研究会) の反省 ○今年度の国際シンポの検討 (担当—後藤 (政), 阿部) ○海外調査について ○予算配分について

8月31日 午前9時～12時

研究報告1. 平井 (横浜における外国籍住民の地域的分布)

研究報告2. 福島 (多文化理解教育と中国帰国者)

(2) 第2回国際シンポジウム

05年11月26, 27日 KUボートスクエアー 各報告のタイトル・発表者・内容については, 第1回 (05年3月29, 30日) の分とあわせて, 本「所報」に掲載しているので, 参照されたい。

3. 研究活動

研究会及びその一環としての国際シンポジウム (拡大研究会として位置づけている) については上記の通りであるが, 研究会としての独自の調査研究は次の通りである。

(1) 05年9月15日 9時30分～16時

横倉, 尹 (亨) が神奈川県立横浜高等学校で民族教育についてヒアリング, 授業参観を行った (なお, これは横浜市国際交流協会主催行事に参加する形で行った)。

(2) 海外調査

①フアイリピン調査 06年2月17～23日 横倉, 永野, 後藤 (政), 富谷が行った。

②台湾調査 06年1月下旬及び2月中旬 2回に分れて, 平井, 尹 (亨) が行った。

本研究奨励金にもとずく研究は05年度をもって終了する。研究活動及びシンポジウム (拡大研究会) によって, グローバル化の一環としての外国籍住民の増加に伴う日本社会の変容及び彼らの生活・就労などの諸問題について認識を深めることができた。その成果については2月から3月にかけて執筆の学長宛の報告書にまとめ, 研究会で発表する予定である。

「加齢による認知機能変化の評価と、環境設計に関する研究」
——サクセスフル・エイジングのために——

研究内容：

- 1 高齢者の認知機能の解明と評価基準の確立
検索作業
色彩環境
歩行等モビリティの改善
- 2 高齢者の生活環境ニーズ調査

採択金額：3,500千円

研究期間：2年間（平成16年度・17年度）

研究メンバー：

研究代表者	和氣洋美	外国語学部	教授	人文学研究所
研究分担者	三星宗雄	外国語学部	教授	人文学研究所
	山下昭子	外国語学部	教授	人文学研究所
	堀野定雄	工学部	助教授	工学研究所
	森みどり	工学部	助手	工学研究所
	後藤智範	理学部	教授	総合理学研究所
研究	張 善俊	理学部	助教授	総合理学研究所

の進捗状況：

- 1 研究装置 高速視覚刺激発生装置 (Visage)
駆動実行プログラム完成
触図提示装置
駆動実行プログラム完成
- 2 低視力コミュニケーション下での行動評価
昨年度、オクルージョン・ホイル装着により視力を段階的に低下させ、視力低下に伴う、調理・買い物・衣服の着脱など日常生活における行動の困難度についての実験調査を行った。本年度は分析を行い、論文を作成した。
- 3 高齢視覚障害者の QOL に関する調査研究
加齢による心身機能低下に起因し、加齢に伴う視覚障害の発症率は高く、それに起因して QOL

(Quality of Life) の低下が起こる可能性は大きいと考えられる。本調査では、視覚に何らかの障害が生じ眼科外来に通院する複数の高齢患者に対し、SF-36, PGCモラルスケールなど、既に学会で認知されている数種類の調査票を用いて、アンケートを行った。調査は現在進行中である。収集されたアンケートに対する回答は、今後「Amos」により統計的に分析され、加齢と視覚障害との関係、および加齢性視覚障害と日常行動特性および生活満足感や幸福感との関係について明らかにされる予定である。

2 平成17年度第1回研究会

開催日：2005年6月6日(月) 13：30～21：00 1114心理学実験室

出席者：三星宗雄，山下昭子，堀野定雄，森みどり，和氣洋美

後藤智範(公務欠席)，張 善俊(在外研究)

内容：研究代表者(和氣)より，研究テーマの再確認，予算執行報告，
購入装置のデモンストラクション

研究報告：

(1) 三星宗雄

反応時間を用いたカラーバレーボールの評価について (I・II)

I ボールの回転方向の検出

II 飛来速度と回転報告検出の関係

(2) 森みどり

高齢者対応の携帯電話の開発に関する研究

(3) 堀野定雄

鎌倉ユニバーサル・デザイン化計画の推進に関する研究

(4) 和氣洋美

二重課題の視機能指標としての利用可能性に関する研究 Visage使用

オクルージョン・ホイルによる低視カシミュレーション下での日常行動の評価

閉眼時描画縮小現象

QOLのための調査検討 ADL, CAT など調査票と調査項目の検討について

3 その他，メール会議多数回

4 今後の活動予定 平成18年度第2回研究会開催予定 3月中旬

(和氣洋美)

2005年度講演会

	月日	氏名	テーマ	所属
1	6/3 (金)	朱 建栄	2005 「反日」を考える	東洋学園大学教授
2	7/2 (土)	レイナルド・C・イレート	Pasyon & Revolution and Philippine Studies from 1980 to the Present	国立シンガポール大学教授
3	7/3 (日)	鈴木 健	在日フィリピン女性のエンパ ワメント	カラカサン —— 移住女性のため のエンパワメントセンター——
4	7/3 (日)	ペリソダ・A・アキノ	The International Conference on Philippine Studies Series: A Brief History and Commentary.	ハワイ大学フィリピン研究セン ター所長
5	8/30 (火)	福元雄二郎	在日、日系ラテンアメリカ人と 多文化共生	神奈川大学附属高等、 中学校教諭
6	12/7 (水)	松井貴子	フォントナーズの自然形象	宇都宮大学教授
7	12/9 (金)	小林信行	環境倫理学と生命倫理学の 双曲線	明治大学教授

(平成17) 年度活動報告書

日中関係史

今年の活動で反省すべきは、普段の研究会や講演会の開催が少なかったことである。この数年、毎年反省してどうしても改められないが、やはり次年度を期したいと思う。以下にやれたこと、これからの期間でやる予定のことを記す。

○講演会

6月3日14時40分～17時

講師、朱建栄氏（東洋学園大学教授）「2000年「反日」を考える」

コメントは田畑光永氏（本学国際経営学部教授）をお願いした。4月に中国の都市部で起こった「反日デモ」についてのホットな話題であり、100名の参加を得て熱のこもった講演と質疑応答になった。なお、この時の朱氏の講演内容は、『神奈川大学評論』52号に掲載されている。

○研究会

グループ参加者の一部が科研費基盤研究（B）「東アジアにおける学の連鎖」の共同研究を行って3年目となり最終年度の活動をしてきたが、これまで4回の研究会を開いてきた（第1回が4月23日、2回が6月11日、3回は8月5日、4回は10月21日）。そのうち2回目には戸川芳郎氏（東京大学名誉教授）、3回は徐一平氏（北京日本学研究センター主任）に報告していただいた。なお、第5回を2月15日に開き、6回目の3月3日には、4人の若手研究者による研究報告を行い、4日には3年間のまとめとして、中国から南開大学劉曉琴氏、徐州師範大学周綿氏、台湾から国史館林清芬氏を招いて「中国人留学生と日中戦争」と題するシンポジウムを開くことにしている。

○現地調査

旧日本租界の現況を調査するため、富井、孫、村井、大里の4名が9月17～23日漢口と上海に出かけた。漢口では、武漢理工大学李百浩氏、上海では、東華大学陳祖恩氏、華東師範大学易惠莉氏に協力していただいた。なお上海では、本学に留学して今は現地で活躍する中国の皆さんとの交流会を開き、大いに盛り上がった。

○論文集出版

1. 数年来取り組んできた租界史研究の成果を本研究所叢書の1冊として出版する（3月、御茶の水書房から刊行）。題名は『中国における日本租界―重慶、漢口、杭州、上海―である。執筆はメンバーの外、上海、武漢の研究者にもお願いした。おかげで、充実した内容に仕上がったと自負している。
2. 上記科研費による共同研究の成果は、本所報に4篇（三好、孫、川島、大里）載せることができた。

（大里浩秋）

.2005年度「文化のかたち」研究会活動報告書

1. テーマ：21世紀の新千年にふさわしい総合的な文化や文明の把握を目指し、新しい、「知の地平」を切り拓く。

2. 代表者：水野 晴光

3. 活動内容：新しいメンバーを迎え入れて総勢16名となった。今年のグループ研究は、個々の会員の研究活動に委ね、11月12日（土）本学人文研究所主催の国際学術シンポジウム「世界から見た日本文化——多文化共生社会の構築のために——」特別記念講演にクロンビア大学名誉教授のドナルド・キーン博士とモスクワ大学のV・イワノフ博士を招聘することに全力を賭けた。しかしながら、生憎V・イワノフ博士が脚を痛められ、特別記念講演に来日出来なくなったため、急遽イワノフ博士のご推薦でモスクワ大学ロシア科学アカデミー主任調査官のD・ラゴージン氏に講演を代行して戴いたが、この特別記念講演の企画自体は全体としてはば成功したと考えてよいであろう。

今後は、約3年に亘ってこのシンポジウムの記念資料集を含む叢書の出版に向けて着手する予定である。

（水野 晴光）

共同研究グループ活動報告

西洋文化の受容

一昨年に、それまでのまとめとして『「明六雑誌」とその周辺—西洋文化の受容・思想と言語』を出版したあと、もう少しその範囲を広げて、『明六雑誌』と同時代の他の諸雑誌の研究もと、再出版した当研究グループあったが、本年度も残念ながら共同研究者たちの多忙その他の理由により、活動報告としては何ら見るべきものないまま過ごしてしまつた。

唯一の活動は、当研究グループと「物語論」の研究グループとが合同して結成された「表象としての日本」の共同研究グループによる2005年9月の箱根保養所における研究合宿のみであった。

次年度からは、本共同研究グループの共同研究員の過半数が所属することになる、新学科「国際文化交流学科」が発足するので、これと関係がなくもない「西洋文化の受容」共同研究グループとしてはそろそろ休眠状態から脱して、活動化させていきたいと思っている

（鈴木修一）

物語研究

1. 研究テーマ：物語の構造分析、歴史叙述と文学
2. 代表者：日高昭二
3. 活動内容：物語研究会は、本年度は、メンバーの大半が「2005年度 神奈川大学共同研究奨励助成」に申請し、その結果大学から採用されたために、研究会としては個別の研究会などは開かれていない。ちなみに、「共同研究奨励助成」のテーマは、「表象としての〈日本〉—国際日本学の新展開」で、こちらの代表も日高が兼ねているために、そのような状況になったのである。もとより、この双方とも大学の学術研究の一環として存在するわけであるから、当分は研究会や講演会なども

「物語研究」と「共同研究」の二つを重ねるかたちで開催していきたい。

(日高昭二)

各国地方史の比較的研究

本共同研究グループは、世界史を現存する国家、民族、文明というレベルで考察するのではなく、地方史という地域概念から見直すことを研究テーマとして取り上げ、年に4回の研究会を開き、各国研究者と他分野研究者の2名の発表を行なうことを目指している。

2005年3月には代表の小林一美氏が退職し、孫安石が代表を引継いたが、まだ進むべき方向が定まらず、今年度には2回の研究会を開いたことにとどまった。次年度以降は外部からの講演者を招き、活動の充実を図りたい。

(1) 2005年7月1日

報告者：廣田律子 (本学経営学部・教授)

テーマ：「呪術としての鉄火」

(2) 2005年11月11日

報告者：小馬徹 (本学外国語学部・教授)

テーマ：「地方史研究とは何かーケニアのキプシギス人最初の『地方史誌』BURETIを糸口として考える」

廣田氏の報告は中国の西南少数民族の民間宗教が1980年代以降、復活する様子を説明した上、最近の追儺の祭りに上演される仮面芸能、そして、火渡りなどの呪術的な性格をもつ民間芸能がどのように行われているのかを、報告者が撮影したビデオなどを通して紹介するものであった。

小馬氏の報告は、本共同研究グループが取り上げる「地方史研究」をアフリカからの視点で問いつくすものであった。とくに、1999年に刊行されたキプシギスの歴史書であるBureti:Focusing into the Next Millennium, 1st Anniversary (Lull Computer Services, Litein, Burei,Kenya,1999) 以前の歴史が民族史や氏族史に比重をおいたものであることに比べ、BURETIの記述はキリスト教に関する内容が突出しており、氏族や血縁など前近代の文化とは独立した近代的な文化の属性に注目しているなどの特徴が見出されると指摘した。

(孫安石)

自然観研究班

今年度は、復本一郎・経営学部教授が幹事として、講演会を開催した。2005年12月7日(水)、神奈川県大学人文研究所会議室において行なわれた。復本教授の招きにより、松井貴子・宇都宮大学助教授が「フオントネージの自然形象」という演題で話をされた。

平塚キャンパスからの先生方、横浜キャンパス広報部の方々も出席されて、このグループの今までの

講演会で最も盛況であった。

(文責 佐藤夏生)

東アジア比較文化研究会

COE関連事業の下記のワークショップを後援した。

「祓いの儀礼と技法」

- ・ 2005年7月23日 13:30～16:00
- ・ 神奈川大学横浜キャンパス 17号館215室

- ・ 顧希佳先生 (杭州師範学院 教授)
「呉越神歌の文化史意義ー祓いの儀礼からみたー」
- ・ アレクサンドル・ズラ (立命館大学 専任講師)
「追儺儀礼における方相氏の役割の変化」

- ・ コメンテーター 廣田 律子 (神奈川大学 教授)

- ・ 企画・主催 中国言語文化専攻

(山口建治)

色彩語の社会言語学的研究

1. 活動内容 特になし (2006年1月に代表者が交代した)。

2. 購入図書 (申請)

- ・ Munsell Book of Color : Nearly Neutral Collection, 出版年無指定,
(代) 海外ブック (合)。
- ・ NCS Atlas 1950 original 第3版, 1996, (代) 海外ブック (合)。
- ・ 「色彩マンボイメント 全10巻」, 1996, 日本規格協会。
- ・ 「景観法を活用するための環境色彩計画」, 吉田慎悟, 2005, 丸善。
- ・ 「英語の感覚と表現ー共感覚表現の魅力に迫るー」, 2005, 吉村耕治編著, 三修社。
- ・ J.アズルトン (菅野弘久訳) 「風景の知覚ー景観の美についてー」, 2005, 法政大学出版局。

(三星宗雄)

横浜研究会活動報告

1. 横浜研究会 (横倉・永野・後藤 (政)・平井・寺沢・福嶋・富谷・尹 (亭)・後藤 (晃)・兼子・大里・孫・阿部・福元)
2. 研究会・シンポジウム・研究活動 本研究会は、「多文化共生社会の創出と日本社会の変容―神奈川県横浜地域を中心に―」を研究課題として、'04, '05年度に神奈川大学共同研究奨励金にもとづく研究活動を行ってきた。'05年度の研究活動については別稿を参照していただければ幸いである。

3. 今後の研究活動 (予定) 共同研究奨励金にもとづく研究は'05年度をもって終了する。これまでの研究活動によって、グローバル化の一環としての外国移住民の増加に伴う日本社会の変容及び彼らの生活・就労実態などについて認識を深めることができた。その成果については、2月から3月にかけて執筆の学長宛報告書にまとめる予定である。本研究では'06年度以降も調査研究を行い、'07年度にはその成果を公刊したいと考えている。

(横倉節夫)

新購入主要文献解題

(岩崎豊太郎)

ロマン主義文学全集

1. 文献名：『ロマン主義文学全集1789-1834年』第8集
Revolution and Romanticism, 1789-1834. 8th Ser. 18 Vols.
2. 著 者：Edited by Jonathan Wordsworth
3. 出版社：Woodstock Books, GBR
4. 出版年月：2000年～2002年

本フランクシミリ・リズリント全集は、フランス革命の勃発（1789年）から英国の代表的なロマン派詩人コールリッジの死（1834年）の間に発表されたロマン主義時代の重要文献のうち、現在入手が困難なものを収録しているフランス革命200周年記念出版物であり、1989年の「第1集」以来、今回の「第8集」まで刊行されている。

本復刻シリーズ全集は、ロマン派詩人・作家の代表的な作品のみならず、フランス革命という政治的事件の影響を多大に受けて、ロマン主義的思潮によって支配された、当時の思想的潮流の全貌にも光をあてるために、政治・歴史・心理・科学的進歩・女性の役割や教育・人間と環境など、ロマン主義時代の精神を伝える諸文献を網羅し、また各タイトルに貴重な解説を添えたコレクションとして企画されている。

この「第8集」には、次の文献を含めた18タイトルが復刻された。

- Jacques-Pierre Brissot de Warville, *New Travels in the United States of America*. 1792. 500 p.
- J. W. Goethe, *Iphigenia in Tauris*. 1793. 140 p.
- Mark Akenside, *The Pleasures of Imagination*. 1795. 216 p.
- Constantin Volney, *The Ruins*. 1795. 256 p.
- Uvedale Price, *On the Picturesques*. 1796. 448 p.
- Erasmus Darwin, *A Plan for the Conduct of Female Education, in Boarding Schools*. 1797. 144 p.
- Percy Bysshe Shelley, *Epipsychidion*. 1821. 44 p.

The Cultic Milieu : Oppositional Subcultures in an Age of Globalization **Jeffrey Kaplan and Hel ne L w (eds.), AltaMira Press, 2002.**

「カルト界：グローバル化時代の対立的サブカルチャー」（2002）は、宗教社会学、サブカルチャー研究、文化研究、若年者文化、新しい社会運動などの分野に興味のあるものならば一度は目を通していただきたい文献の一つである。「カルト界(cultic milieu)」という用語は英国の社会学者コリン・キャンベル

によるものであるが、本書におけるその意味は秘教的信仰という宗教的性格を持つ集団にとどまらない。その射程はずっと広く、明確な信念を持つ政治グループや、とりわけ一九六〇年代以降の対抗文化として神秘主義思想、「東洋」礼賛主義、オカルト、心霊現象、ニューサイエンス、シャーペンズム、自然主義、瞑想など、いわゆる「近代的物質文明」に対立した信念やそれに基づいた実践や運動も含んでいる。この文化的潮流の裾野は広く、オウム教などのようなカルト宗教団体のみならず、現在では映画・アニメ・マンガなどのポピュラー・カルチャーを通じて日常生活に浸透している状況がある。したがって、事例研究として選択されている様々な政治的・文化的集団や現象は「単なる愛人の集まり」として外部化できない側面があることにわれわれは気がつくのである。本書における諸事例は、ラディカル政治集団、ゴジック・サバカルチャー、ラディカル・エコロジスト運動、ネオナチ、ニューエイジ・サバカルチャー、反カルト運動など多様であり、これらの現象が反グローバル運動と共通点が多いことなど、グローバル化という現代的コンテクストでの考察となっている。

そして、本書のすぐれているところは、政治的左右の対立図式を超えた相同性（ラディカルな信念や運動における「純正」概念への執着など）や対抗文化の「両刃の剣」的な性格という複雑な局面にも注目しているところである。対抗文化は、新しい社会のオルタナティヴを創造したりもするが、一方で閉鎖的な信念や逸脱に収束していく側面もある。これからのサバカルチャー研究や文化研究、社会変動などの考察に欠かさない視点に気づかせてくれる文献である。

(笠間千浪)

福沢諭吉年鑑 1～22

社団法人福沢諭吉協会・非売品

1974年～1995年

福沢諭吉協会発行の同協会員のみ配布される

福沢諭吉についての

- I 福沢諭吉関係新資料
- II 福沢諭吉研究論文
- III 再録福沢諭吉研究論文
- IV 福沢研究文献目録
- V 土曜セミナー他講演記録
- VI 書評
- VII 研究文献案内

等の内容からなる。(年度により上記I～VIIの出入りがある)

福沢諭吉研究の基本的研究文献ともいえるものである。

(鈴木修一)

近代海外留学生史 上／下2巻

渡辺 實著・講談社・1977年

日本の近代化にあたって、幕末・維新时期そして明治から大正にかけて欧米に送られた留学生の果たした役割は非常に大きなものがあったが、その留学生の歴史についての概観的な通史。

概観的な、とは言っても、上下二巻合わせて1,000頁を越える大冊で、以下のような内容構成になっている。

第一編	総説
第二編	黎明期の留学
第三編	幕末期の留学
第四編	明治前半期の留学（明治元年～明治28年）
第五編	明治後半期の留学（明治29年～大正元年）

この書が出版されて30年近くになり、個別的な留学生の研究は各分野で大きく進んでいるが、特に明治期全般にわたる留学生史については、未だこれを越える通史は出ていない、と言ってもよいだろう。

（鈴木修一）

特命全権大使米欧回覧実記 全5巻

水澤周現代語訳及び注

慶応義塾大学出版・2005年5月

『特命全権大使米欧回覧実記』（久米邦武編著）は、現在、岩波文庫で容易に入手できるが、その原文を辞書その他参考書の助けを借りずに読むことは、研究者といえども簡単ではないであろう。本書は水澤氏により、丁寧な現代語訳化され、訳注が付けられて見事に現代によりみが見られていると言えよう。

この書の研究も近年、欧米の研究者たちの注目により、大使一行が、滞在した国々の人により個別に進められているが、われわれ日本人としては、彼らの視点とは異なるとは言え、先ず、このテキストを通覧することが先決であり、そのための強力な助けとなること間違いない、と思われる。

（鈴木修一）

Die Iwakura-Mission

Peter Pantger. IUDICIUM Verlag GmbH Muenchen 2002

本書は久米邦武編著『特命全権大使米欧回覧実記』全5巻全百章のうちの、ドイツ語文化圏（ドイツ・オーストリア・スイス）の部分についての、ドイツの研究者たちによる、ドイツ語訳、及び注と参考資料よりなり、600頁を越える大冊である。

副題として

Das Logbuch des Kune Kunitake
über den Besuch der japanischen

Sondergesandtschaft in Deutschland, Österreich und der Schweiz
in Jahre 1873

が付されており、編訳者として上記にP.Panzer氏を揚げたが実際は同氏がリードして、M.Eichhorn. K.Hilker. L.Narangoa. M. Schrimpf との共同作業によるものである。

冒頭に「北海道大学名誉教授田中彰先生に心からの感謝を込めて捧げます」との献辞がかかげられている。内容は久米のテキストから、ドイツ、オーストラリアスイスについての部分の独訳及び詳細なドイツ語文化圏の研究者ならではの考証され訳注 (S.1～S.442)の他、資料編 (S.443～S.502) 年表 (S.503～S.509)

人名地名の和欧の表記一覧、文献等から構成されている。

(鈴木修一)

『コレクシヨン・モダン都市文化』第二回配本
和田博文監修 ゆまに書房 2005年4月刊

本書は、文学・美術・映画・演劇・経済・商業・建築・交通・スポーツ・ファッションなど、多面的な視点から1920年代～1930年代のモダン都市文化の魅力を把握する叢書です。全20巻がテーマごととの編集になっており、このうち第一回配本は第6巻から第10巻までの購入である。その5巻の内容は、「丸の内のビジネスセンター」「円タク・地下鉄」「デパート」「競技場」「広告と商業美術」となっている。ちなみに第二回配本は、「銀座のモダニズム」「ファッション」「築地小劇場」「ザンスホール」「モダン都市景観」であった。巻末には、詳細な解題・エッセイ・関連年表・主要参考文献が収録されており、テーマの追求がより深く探求されるよう配慮されている。図版も豊富で、モダニズム研究に必須の文献である。それぞれの研究テーマに応じて活用されたい。

(日高昭二)

所員の白著紹介

Subete al espanol

——スベイン語で行こう！(デキスト)

アルトゥーロ・バロソルペス・高松英樹・佐藤麻

里乃・二宮哲 著

朝日出版社2006年4月1日 (76頁)



『ことばの習得と喪失

——心理言語学への招待』

勁草書房 伊藤克敏著

2005年4月25日刊 (192頁)

ことばの習得と喪失は表裏一体を成している。

本書は両者の関係を多角的に捉えようとする試みである。前著『子どものことば——習得と創造』(勁草書房)と子どもの母語習得過程のみを扱ったのであるが、本書では子どもの母語習得と第2言語習得・教育やバイリンガリズムとの関係について最近の研究成果を踏まえ考察している。

大人の言い誤りは方言や退行現象として幼児のことばとの関係で考察している。ことばの喪失については、脳の障害によるものと長期の海外生活、高齢化による母語喪失との相関性を論じ、更に、幼児ことばとの関係について考察している。

第1章前半では最近注目されているトマセロ(Tomasello, 2003)の研究に言及しながら、子どものことばの発生と習得過程を考察している。特に、文法関係の習得については最近の研究を紹介しながら、文構造の構築原理、複文の習得過程についての仮説を提示している。後半では最近研究が進みつつある発達語用論 (Developmental Pragmatics) の研究成果を踏まえ、会話能力の発達、ことばによる子どもの社会化の問題を扱っている。

第2章では獲得した母語をどのように喪失していくのかを脳損傷による失語、認知症による言語喪失、長期海外生活による母語忘却の3つのケー

スを比較しながら共通点を探る。また、それらと子どものことばや大人の言い誤りとの相関性も検討している。

第3章では脳の発達と機能の観点から母語習得と外国語習得との相関性について考察し、児童の外国語習得の特徴と外国語習得の開始時期について検討する。更に、子どものバイリンガル習得過程とその特徴、バイリンガリズムに対する評価の変遷などについて言及している。

第4章では、大人の言い誤り (speech errors) を音声、語形態、意味、統語の面から分析し、言い誤りの構造と特徴の解明を試みている。そして、言い誤りと幼児の発達途上言語 (developing language), そして方言の特徴との相関性についても考察している。

第5章では、ヨーロッパやアメリカにおける「ことばと心理」に関する研究の史的展開と最近の研究動向を鳥瞰している。

ことばと心理の研究には2つのアプローチがある。1つはことばと心理・認知の関係を説明するための理論的モデルを構築する方法と、もう1つは子どもの発することばを分析し、発達段階によることばの発達過程を研究したり、ことばの誤用とか発せられたことばを手がかりにことばの心理的処理方略について研究する方法である。両者は相補的な関係にある。

本書では両者を比較しながら、後者、つまり、発達心理言語学や実験心理言語学の立場を取っている。あくまでも生のデータの分析 (こういった言語現象の分析に基づいた研究は最近 Usage-Based Approach (M. Barlow & S. Kemmer eds, 2000) と呼ばれている) からことばの発達過程やことばの処理についてのメカニズムに迫ろうとする方法を取っている。



『スタール夫人』（人と思想シリーズ185）
佐藤夏生著 清水書院2005年11月（227頁）

フランス革命勃発時の財務総監ジャック＝ネットルの愛娘であるスタール夫人。彼女はロマン主義理論を確立した文学者として、『ゼルフィース』や『コリーヌ』でヨーロッパに大きな反響を巻き起こした小説家として知られる。しかし夫人は文学ばかりでなく、革命についてを含め、政治・社会・文化の広い領域にわたる著作を残している。

その生涯はフランス革命の時期と重なるが、18世紀サロンで育まれ、激動の革命期を生き抜き、皇帝ナポレオンと対立して追放の憂き目にあう。自由を求めて、レマン湖畔のコペからモスクワを経てロンドンに亡命する。

本書は夫人のそうした生涯と思想を、近年の活潑なヨーロッパでの研究成果をふまえて描き出した、日本初の著作である。



『副詞的表現をめぐって——対照研究——』
武内道子（編著） ひつじ書房 2005年3月31日
（252頁）

本書は、神奈川大学言語センターの共同プロジェクトのひとつ「言語の普遍性と個別性に関する研究」という研究グループによる最初の出版物である。

神奈川大学外国語学部には、日本語、英語をはじめ、中国語、韓国語、ロシア語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語など多彩な言語を研究対象としている人が集まっている。ひとつの言語現象をめぐって個々の言語の実際を語る場があれば面白いだろうという発想のもと、「対照言語研究会」を立ち上げ、97年以来研究会を重ねている。2003年度に、神奈川大学共同研究奨励金への応募の際、まとまった形で発信しようということになり、すではじめていた副詞的表現の研究をテーマに、多額の研究資金をいただき、本書刊行の運びとなった。本書に収められた10篇の論考は、すでに退職ないしは転職された3人を含むメンバーの共同研究活動の成果である。

副詞そのものをタイトルに掲げた研究書がほとんどないのは、その意味、機能、形態の取り扱いが難しいということであろう。本書は副詞的表現ということによって、既成文法の枠にとらわれることなく、副詞なるものを緩やかに捉え、広く研究を取り込んでいる。分析的方法論的枠組みも文法論、意味論、語用論にまたがる。さらに、日、英、中、露、仏という言語に横断的に渡り合っているということ、対照研究と銘打っている。副詞的表現と目される形式がそれぞれの言語で、どのように語彙化され、構造化され、使用に供されているかという点に関心を寄せ、副詞的表現なるものが複雑、多様であるという本質を浮き彫りにしようとしている。



『クラウン西和辞典』
原誠、エンリケ・コントレーラス、寺崎英樹他
（共著）
三省堂2005年4月（xi+2065頁）

見出し語5万2千で、今のところ西和辞典としては最大級の語数を持つ。その中の基本語約7,600語は特に記述を厚くし、どの語義にもかならず用例が付してあるのが特徴である。筆者は主に基本語の形容詞・副詞と動詞の一部、文法解説などを担当した。実際に執筆を始めてからでも20年以上を要し、初めの頃の原稿は手書き、後半はパソコン利用に変わり、辞書編纂の方法もかなり様変わりした。



『キリスト受難詩と革命——1840～1910年のフイリピン民衆運動』
レイナルド・C・イレート著、清水展・永野善子監修、川田牧人・宮脇聡史・高野邦夫訳
法政大学出版局〈叢書ユニベルシタス827〉2005年9月（xxvii+510頁+43頁）

本書は、それまでの研究とは異なり、スペインとアメリカの二つの植民地支配に対するフイリピン民衆の抵抗運動の特徴を、フイリピン農村社会

の一般民衆あるいは大衆の意味世界の枠組みにもとづいて理解するという、新しい研究視座を提起した歴史書である。原書の刊行は1979年であるが、刊行後四半世紀を経ても本書が提起した枠組みを超えた研究はない。本書は未刊行の一次史料や既刊文書を渉猟することによって、一般民衆のあいだで伝承されてきた歌や詩や宗教伝統などを掘り起こしたものである。そのなかでも、パシヨン、すなわちキリストの人生と死と復活についての現地住民による語りが、変化を志向する運動の文化的枠組みを築いたことを鮮やかに描き出した名著である。

この意味で、本書は、「近現代フアイリピンにおける植民地支配に対する民衆の抵抗思想と行動」についての一犬叙事詩である。本書を一読すると、著者イレートの類まれな知性に支えられた構想力と、その繊細な感性からにじみ出る艶やかな筆致に感嘆せざるをえない。その理論的な綿密さと情緒豊かな物語の構成様式は、本書がきわめて完成度の高い学術書であると同時に、稀有の優美さを持ったひとつの芸術作品であることを示している。不朽の名作といわれる所以である。

人 文 学 研 究 所 共 同 研 究 ズ ル ー プ 一 覧

2006年1月26日

No	名 称	研 究 テ ー マ	活 動 計 画	代 表 者	メ ン バ ー	人 数	書 数
1	日中関係史	1.明治期から現在までの日中関係の諸問題	1.各自の関心に基づきの講演会、研究会(年4回程度) 2.中国人日本留学史と日本人中国留学史に関する調査研究(科研費の共同研究) 3.中国における日本租界史の研究を継続する。	大 里	大里・中島(三)・松本(安)・日高・山口(健)・鈴木(陽)・彭・孫・村井(寛)・〔営〕田畑・〔非〕木山・〔非〕吉川(良)・〔非〕楊(中)・〔非〕梁・〔非〕呉・〔学外〕小林(一)・〔学外〕李・〔学外〕川島・〔学外〕並木	18	2005年 予定
2	文化のかたち	21世紀の新千年にふさわしい総合的な文化や文明の把握を目指し、新しい「知の地平」拓く。	今年度は、メンバーの刷新を計り、グループの個々の研究活動を活性化してゆく。11月～12月にコロソビエタ大学のドナルド・キーン氏をはじめ数人の日本文化研究の第一人者を海外から招いて、日本の有識者と共にシンポジウムの開催を企画している。3年に亘って行われる、日本文化研究に関する記念資料集の出版に向けた原稿の取り纏めと検討作業にも着工する。	水 野	水野・〔学外〕中本・岩本・羽佐田・小馬・鈴木(修)・堤・〔非〕秋山・大須賀・〔非〕佐藤(江)・〔非〕矢島・石井(美)・ヒル・細田・〔学外〕湯田豊・〔学外〕赤坂	16	2004年 出版
3	西洋文化の受容 — 思想と言語 —	近代日本における西洋文化受容の総合的研究	昨年度は、それまでの研究成果の報告として、人文学研究所の叢書『明六雑誌とその周辺』を刊行したが、本年度からは、新たに従来の『明六雑誌』の研究から範囲を広げて同時代、明治初期の他の雑誌も研究対象とし、より包括的な「近代日本における西洋文化の受容の総合的研究」を追求していく。具体的には、従来のように、月例会。研究会、海外、国内調査を行って行きたい。	鈴木(修) 木 高 野	・鈴木(修)・伊坂・岡島・中島(三)・山口(健)・孫・〔法〕吉井・〔経〕池上・〔学外〕高野・〔学外〕岡野(西)・〔学外〕浅山・尹(健)	12	2003年 出版
4	物語研究	物語の構造分析 歴史叙述と文学	1.研究会：5～6回程度を予定。 2.ニュースレター：不定期だが、必要に応じて2～3回発行 3.講演会：1回～2回程度学外から講演者を招請 4.叢書刊行へ向けての準備：各人の執筆分担と執筆内容、全体の構成などを具体化	日 高	日高・伊坂・鈴木(修)・鈴木(陽)・小馬・鈴木(彰)・鳥越・村井(ま)・山口(三)・坪井	10	2006年 検討中
5	各国地方史の比較史的 研究 — 新編中国地方志叢書を中心として —	世界史を現存する国家、民族、文明というレベルで考察するのではなく、地方史という地域史的観点から見直すことを目的とする	本学研究所は、中華人民共和国地方志叢書を大量に所蔵し、又現在も継続購入している。この貴重な蔵書を本学の中国研究者を中心に、読み、調べ、分析する。その為の研究会を開催し、また世界各地域の研究者にも参加して頂き、現在の国家、民族、文明に吸収しない文化の多様性を再発見する作業を行う。	孫	孫・大里・岡島・村井(寛)・〔経〕柳沢・〔営〕廣田・〔学外〕佐々木・〔学外〕谷川・〔学外〕小林(一)・〔職員〕吉田・〔職員〕額賀	10	検討中

[名] 名誉教授
[非] 非常勤講師
[学外] 学外研究所

人文学研究所共同研究グループ一覧

2006年1月26日

№	名称	研究テーマ	活動計画	代表者	メンバー	人数	歳書
6	自然観の研究	自然観の変遷と展望	以下の三分野について、順次、研究会および講演を行う。 1.思想における自然観 (2000-2001年) 2.文学における自然観 (2002-2003年) 3.環境問題における自然観 (2004年)	佐藤 (夏) (夏)	佐藤 (夏)・伊坂・岩崎・奥田・鈴木(修)・中村(浩)・松本(安)・〔宮〕復本・坪井	9	2005年 予定
7	東アジア比較文化研究会	日本、中国、朝鮮等の言語、文学、歴史、民俗などを比較文化的視点から研究	1.年に数回、研究発表会を開催する。 2.個別課題ごとに研究グループをつくり、各種の研究助成に応募する。	山口(建) (建)	山口(建)・福田・中島(三)・日高・大里・彭・鈴木(陽)・孫・小島・前田(権)・〔経〕佐野・〔経〕河野・〔宮〕田畑・〔宮〕廣田	14	未定
8	色彩語の社会言語学的研究	1.色彩カテゴリーの社会的ゆらぎに関する研究 2.上記ゆらぎの異文化の対照学	色彩カテゴリー(色名を含む)の示す色空間上の範囲について実験・調査的に測定し、それからのゆらぎについて社会意味論的な観点から分析する。また異文化間の比較的対照を行う。	三星 (建)	彭・三星・小島・堤・尹(亭)・松村・新木・加藤・張・星野	10	未定
9	横浜研究	横浜における多文化共生会の創出の研究	’04年度は、台宿による研究会の他に3回に市役所等の調査を行い、また、3月29日、30日には国際シンポジウムを開催した。 ’05年度は、その上になって ①横浜地域を中心とした外国籍住民の調査及びフイリピン等の調査を行う。 ②国際シンポジウム第2回開催を予定している。	横倉 (建)	横倉・後藤(政)・永野・寺沢・孫・平井・尹(亭)・大里・富谷・〔経〕後藤(晃)・〔経〕兼子・〔法〕阿部	12	検討中
10	神々のコスモロジー	世界の様々な国や地域の宗教事情、神観念・教義・世界観・生死観・道徳・宗教意識・生活などなどについて、研究者それぞれの得意とする学問分野から接近する。	年3〜4回程度の研究会。そのうち1〜2回は、学外から招いた専門家による講演会を予定している。二年間の活動後、平成19年度(2007年)中の出版を計画している。	寺沢 (建)	寺沢・〔宮〕新垣・小島・鈴木(彰)・山口(建)・尹(亭)・〔学外〕湯田	7	2007年 予定
11	言語変異研究	1.地域文化と言語変異 2.時代変容と言語変異 3.社会階層と言語変異 4.社会意識と言語変異	1.研究テーマに即した研究調査を行う。 2.講演会・研究会を開催する。	彭 (建)	彭・〔非〕浅井澄民・加藤・〔非〕陶・松村・〔非〕山村	6	

〔名〕 名誉教授
〔非〕 非常勤講師
〔学外〕 学外研究者